

1005

(5)

突撃作業教範草案

七年九月一三三三番

七年九月甲卯四號

あき

大正七年七月
教育總監部

1006

突撃作業教範草案

目次

總則

第一篇 障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作

業

通則

第一章 障碍物ノ破壊

要則

障碍物破壊用器具及爆藥

目次

一頁 三三三五六

1007

目次

要旨	七
障碍物破壊用器具	七
障碍物破壊用爆薬	十七
鐵條網ノ破壊	十五
要旨	十五
器具ニ依ル破壊	十六
爆薬ニ依ル破壊	二十八
鹿砦ノ破壊	四十
要旨	四十
器具ニ依ル破壊	四十二

目次

爆薬ニ依ル破壊	四十五
鐵柵、狼狽、拒馬、地雷等ノ破壊	四十六
側防設備及外岸壁ノ破壊	五十三
第二章 障碍物ノ掩覆通過	五十四
第三章 突撃器材ノ用法	五十七
要則	五十七
突撃器材	五十八
滑棒ノ使用	七十二
梯子ノ使用	七十七
携帶橋ノ使用	八十二

600T

目次

四

昇降網ノ使用	九十二
第二篇 突撃路ノ開設	九十四
第一章 一般ノ要領	九十四
要則	九十四
偵察	九十七
準備	百五
實施	百八
第二章 外壕前ニ於ケル突撃路ノ開設	百十一
第三章 外壕ニ於ケル突撃路ノ開設	百十七
第三篇 手榴彈ノ用法	百二十三

目次

通則	百二十三
第一章 手榴彈ノ種類	百二十六
制式手榴彈	百二十六
急造手榴彈	百三十二
要旨	百三十二
急造曳火手榴彈	百三十四
急造著發手榴彈	百三十六
演習用手榴彈	百三十九
第二章 手榴彈ノ投擲	百四十一
要則	百四十一

五

1011

目次

彈尾ヲ持チ投擲スル方法

彈體ヲ持チ投擲スル方法

第三章 手榴彈ノ利用

攻撃ノ場合

塹壕内戰闘ノ場合

防禦ノ場合

百四十六

百五十七

百五十八

百五十九

百六十

百六十二

突撃作業教範草案目次終

突撃作業教範草案

總則

第一 本教範ハ突撃防止ノ設備ヲ有スル陣地ノ攻撃ニ方リ器材及爆藥ニ依リ突撃路ヲ開設スル方法ヲ示シ且手榴彈ノ用法ヲ掲ケ以テ之カ練成ヲ圖ルヲ本旨トス

第二 突撃防止ノ設備ヲ有スル陣地ノ攻撃ニ於テ突撃作業ノ適否ハ突撃ノ成否ニ至大ノ影響ヲ及ホスモノトス而シテ此作業ハ敵前咫尺ニ迫リ危險凄慘ノ裏ニ在リテ實施スルヲ常トスルヲ以テ之ニ任スル者ハ特ニ其責務ノ重大ナルヲ肝銘シ如何ナル困難

總則

總則

ノ狀況ニ在リテモ全力ヲ竭シテ能ク作業ヲ決行シ以テ突撃部隊
ノ爲肉薄ノ自由ヲ與ヘサルヘカラス

第三 突撃作業ハ歩兵及工兵ノ任トス然レトモ爆薬ニ依ル障礙
物ノ破壊其他特ニ困難ナル作業ハ工兵専ラ之ヲ擔任スルモノト
ス

將校ハ本教範ニ示セル諸規定ノ精神ヲ玩味シ能ク之ヲ突撃作業
ノ實施ニ應用シ以テ適當ニ部下ヲ指導シ得ルヲ要ス特ニ工兵將
校ニ在リテハ本作業ニ關スル技能ヲ深ク練磨スルト共ニ部下ヲ
訓練シテ其精熟進歩ヲ圖リ如何ナル場合ニ在リテモ能ク正確迅
速ニ作業ヲ遂行シ得シメサルヘカラス

第四 突撃作業ノ演練ニ在リテハ危害豫防ノ設備ヲ完全ニシ兵卒ヲシテ遲疑スルコトナク作業ニ従事セシメ以テ益々其自信力ヲ増進セシムルヲ要ス

第一篇 障碍物ノ破壊竝通過ニ關

スル作業

通則

第五 障碍物ノ破壊竝通過ニ關スル作業ハ障碍物破壊用器具ハ同爆藥竝突撃器材ノ使用法ニ習熟スルヲ以テ其基礎ヲ爲スモノトス

障碍物ノ破壊竝通過ニ關スル作業

第六 障物中鐵條網、鹿砦及鐵柵等ハ器具若ハ爆藥ニ依リテ之ヲ破壞シ外壕ハ突撃器材ヲ使用シテ之ヲ通過スルモノトス又簡易ナル障物ハ適當ナル材料ヲ用ヒ掩覆シテ通過スルモノトアリ

第七 障物ノ破壞並通過ニ關スル作業ニハ隱密法ト強行法トノ二種アリ隱密法ハ敵ノ耳目ヲ避ケ靜肅ニ之ヲ行ヒ強行法ハ敵火ノ損害ヲ顧ルコトナク迅速ニ之ヲ行フモノトス
隱密法ハ其動作最モ困難ナルヲ以テ特ニ之カ練習ヲ重スルヲ要ス又其教育ニ方リテハ兵卒ヲシテ先ツ晝間十分ニ其要領ヲ會得セシメタル後夜暗ニ於テ實施セシムルモノトス

第八 障碍物ノ破壊ニ用フル爆薬ノ使用ハ爆破作業ト密接ノ關係ヲ有スルヲ以テ兵卒略々爆破作業ニ熟シタル後之ヲ行フモノトス而シテ之ヲ練習ニ方リテハ先ツ擬製品ヲ用ヒテ其要領ヲ會得セシムルヲ可トス

第九 本篇ニ規定スル作業班ノ編成ハ特別ノモノヲ除クノ外凡テ最小限ノ幅員ヲ有スル突撃路ヲ開設スル場合ノ標準トス

第一章 障碍物ノ破壊

要則

第十 障碍物ヲ破壊スルニハ器具若ハ爆薬ヲ使用スルモノトス

障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障碍物ノ破壊

但爆藥ヲ使用スルトキト雖豫備トシテ別ニ破壞用器具ヲモ準備スルヲ要ス

第十一 障礙物ノ破壞ハ主トシテ鐵條網及鹿砦ニ對シテ之ヲ練習セシムヘシ是鐵條網及鹿砦ハ障礙物中最モ多ク使用セララルモノニシテ且之カ破壞法ニ習熟スルトキハ其他ノ障礙物ヲ破壞スルニモ亦之ヲ應用スルコトヲ得レハナリ

第十二 障礙物ノ隱密破壞ニ方リテハ作業ノ經過中ニ於テ強行破壞ニ變スヘキコトアルヲ顧慮シ豫メ之ニ應シ得ル如ク人員、器材ヲ準備シ置クコト緊要ナリ

障礙物破壞用器具及爆藥

要旨

第十三 障碍物破壊用器具及爆薬ハ破壊ノ目的ニ應シ常ニ機能ノ完全ナルモノヲ使用スヘシ爆薬ニ於テ特ニ然リトス

第十四 障碍物破壊用器具及爆薬ヲ携持スルニ方リ隱密作業ヲ企圖スルトキハ器具、爆薬及武器等ノ觸撃ニ依リ音響ヲ發セシメサル如ク特ニ注意スルコト緊要ナリ

障碍物破壊用器具

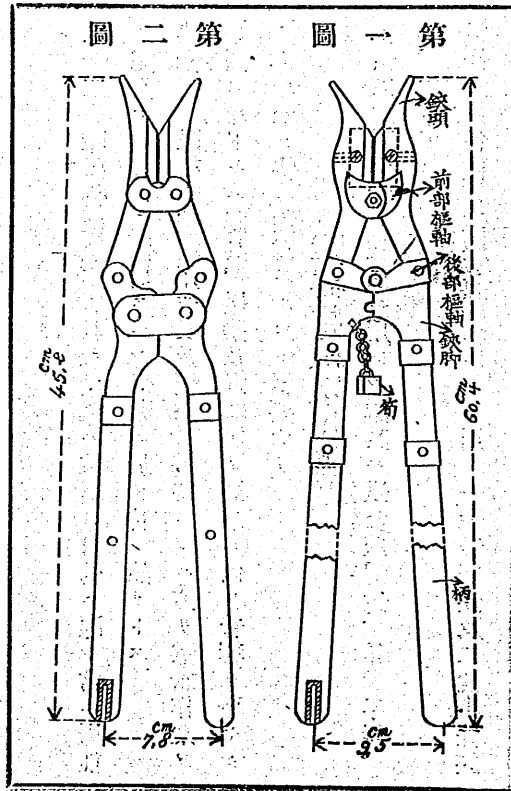
第十五 障碍物ノ破壊ニ用フル器具ハ鐵條鋏、鉋、斧、手斧、鋸、鎌等トス

鐵條鋏ハ各種ノ鐵線ヲ截斷スルニ用ヒ一號鐵條鋏及二號鐵條鋏

障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障碍物ノ破壊 七

1019

圖二第 圖一第



障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

八

ノ二種アリ、

一號鐵條缺ハ缺頭、前部及後部ノ樞軸、缺脚並柄ヨリ成リ缺頭ヲ開キ之ニ鐵線ヲ托シ柄ヲ緊壓シテ截斷ス缺脚ノ前部ニハ一箇ノ筭ヲ備ヘ之ヲ後部樞軸ノ後端ニ在ル孔ニ挿入シ及部ノ嚙ミ合セテ制限シ以テ隱密作業ニ方リ鐵線ニ切缺ヲ設クルノ用ニ供ス及ハ螺輪ニ依リテ駐螺ヲ脱シ適宜之ヲ交換スルヲ得シメ又一箇ノ柄ノ後端ニハ一孔ヲ設ケ鐵線ヲ挿入シテ之ヲ屈曲スルニ用フ(第一圖)

二號鐵條缺ハ筭ヲ備フルコトナク又換及ヲ行ヒ得サル外其構造ハ概ネ一號鐵條缺ニ同シ(第二圖)

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

十

第十六 障礙物破壊用器具ノ携持法ハ狀況ニ依リ臨時之ヲ定ム

ヘシト雖概ネ以下示ス要領ニ依ルヘシ

鐵條鉞ハ通常後部樞軸ヲ握リ鐵部ヲ前ニシテ之ヲ提ケ或ハ體ノ

側面若ハ背部ニ於テ柄ヲ帶革ノ間ニ挿入ス

鉞、斧、手斧、鋸、鎌ハ鐵條鉞ノ携持法ニ準ス但之ヲ提クルト

キハ通常鐵部ニ近ク其柄ヲ握ルモノトス

障礙物破壊用爆藥

第十七 障礙物ノ破壊ニ用フル爆藥ハ障礙物破壊筒、シヤウガクシツクイワ展列裝藥

及集團裝藥トス

障礙物破壊筒ハ各種障礙物ノ破壊ニ使用スルモノニシテ其構造

及機能ハ本教範附録ニ依ルヘシ
 展列裝藥及集團裝藥ハ通常黃色藥ヲ用ヒテ之ヲ急造スルモノト
 ス而シテ展列裝藥ニ依ルモノヲ特ニ爆藥筒ト稱ス
 第十八 爆藥筒ハ通常最強展列裝藥（毎米ニ付爆發罐五箇若ハ
 方形黃色藥二十五箇）ヲ竹若ハ貫板等ヲ以テ被包シ其兩端末ニ
 各一箇ノ木栓ヲ嵌裝シ（頭部ノ木栓ハ爆藥筒ノ裝置ヲ容易ナラ
 シムル爲前端ヲ尖削シ又後端ノ木栓ニハ中央ニ孔ヲ穿テ火具ヲ
 貫通ス）鐵線ヲ用ヒ中間數點ヲ堅固ニ結束シタルモノニシテ其
 長ツハ携行ノ便否、裝置ノ難易及破壊スヘキ障礙物ノ深サ等ヲ
 願慮シテ之ヲ定ムルモノトス

障礙物ノ破壊或通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

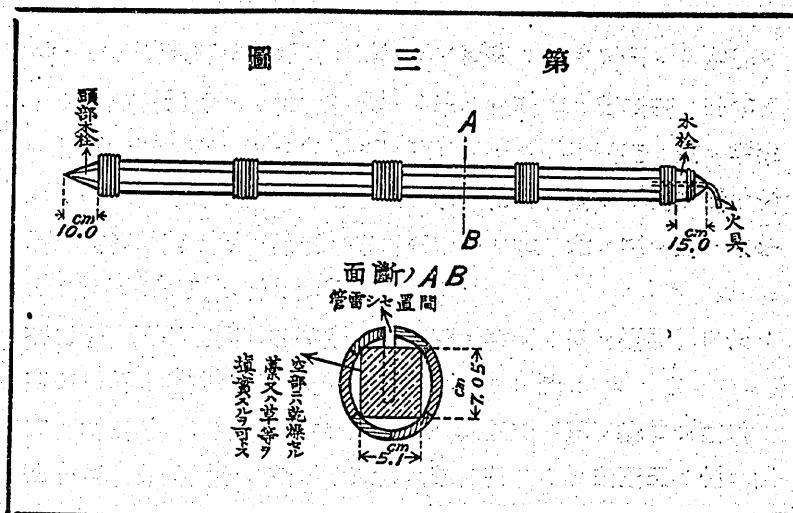
點火裝置ニハ通常導火索點火ヲ用フ而シテ破壊スヘキ障礙物ノ深サニ應ジ二箇以上ノ爆藥筒ヲ使用スルトキハ速燃導火索又ハ導火管ニ依ル齊發裝置若ハ各別且同時ニ點火シ得ル如ク之ヲ準備スルモノトス

爆藥筒ハ其爆發ヲ確實ナラシムル爲長サ約三米〇〇毎ニ第三圖斷面圖ノ如ク雷管一箇ヲ裝著スルヲ可トス

爆藥筒ニ防濕ノ設備ヲ要スルトキハ被包ニ鐵葉ヲ用フルヲ可トス時トシテハ防水布等ヲ用ヒ筒ノ外部ヲ被包スルヲ以テ足レリトスルコトアリ

第三圖ハ割竹ヲ以テ被包シタル爆藥筒ノ一例トス

1024



十三 鐵管ノ構造 兼其ノ断面ニ關スル圖 鐵管ノ構造ニ關スル圖

1024

第十九 集團裝藥ノ構造ハ爆破教範ニ依ルヘシ但堅固ニ之ヲ梱包シ且火具ノ保護ヲ確實ナラシメ又其用途ニ應シ携行及裝置ニ便ナル如ク結構スルコトニ特ニ注意スルヲ要ス

第二十 障物破壊用爆藥ノ携持法ハ狀況ニ依リ臨時之ヲ定ムヘシト雖概ネ以下示ス要領ニ依ルヘシ

障物破壊筒ハ通常其長サ毎二米〇〇ニ付一名ノ比ヲ以テ兵卒ヲ配當ス各兵卒ハ之ヲ其同一側ニ於テ右(左)腋下ニ抱キ或ハ之ヲ右(左)肩ニ擔ヒ又匍匐スルヲ要スルトキハ破壊筒ニ綱ヲ結著シ之ヲ左(右)肩ヨリ右(左)腋下ニ掛ケテ携持ス但最後ノ場合ニ在リテハ破壊筒ト地面又ハ地物トノ觸接ニ依リテ生スル音響ヲ

防止スル爲豫メ布、蓆等ヲ以テ之ヲ被包シ且點火裝置ノ保護ヲ
確實ナラシムルコトニ注意スヘシ

爆藥筒ハ障礙物破壞筒ノ携持法ヲ適用ス

集團裝藥ハ之ヲ提ケ或ハ腋下ニ抱キ若ハ肩ニ掛ケ又其大ナルモ
之ニ在リテハ之ヲ背負ヒ或ハ擔棒ヲ用ヒ數人ニテ携フルモノト
ス

鐵條網ノ破壞

要旨

第二十二 鐵條網ノ破壞ニ用ツル器具及爆藥ハ主トシテ鐵條鉄

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

及障礙物破壞筒トス又障礙物破壞筒ニ代フルニ爆藥筒ヲ用フル
コトヲ得

第二十二 鐵條網ヲ破壞スルニハ破壞孔ヲ成ルヘク鐵條網帶ニ
直交セシメ杭及鐵線ヲ除去スルヲ可トス然レトモ器具ヲ用フル
場合ニ在リテハ杭ノ一側又ハ兩側ニ於テ鐵線ノミヲ截斷スルヲ
通常トス

第二十三 普通鐵條網ノ破壞法ハ以下示ス要領ニ依ルヘシ其他
ノ鐵條網ニ對シテモ亦之ヲ準用スルモノトス

器具ニ依ル破壞

第二十四 器具ニ依リ隱密ニ鐵條網ヲ破壞スルニハ通常下士ニ

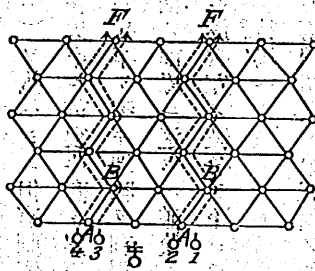
名兵卒四名ノ一班ヲ以テス
 班長ハ兵卒ヲ一列ニ集メ番號ヲ附シ之ニ鐵條鉄各二（内一ハ豫
 備トス）ヲ携ヘシム但有刺鐵線ヨリ成ル鐵條網ヲ破壊スル場合
 ニハ各兵卒ニ革製手套ヲ穿用セシムルヲ可トス
 班長ハ兵卒ヲ率キ地物ヲ利用シ要スレハ匍匐シテ靜肅ニ前進シ
 鐵條網ノ前縁ニ達セハ破壊スヘキ杭列ヲ指示シ記號ヲ用ヒ或ハ
 低聲ニ逐次左ノ號令ヲ下シテ作業ヲ實施セシム
 持場へ
 兵卒ハ第四圖又ハ第五圖ノ如ク位置シテ伏臥スル
 掛

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊 十七

第一法

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

第四圖



側ヲ握リ静ニ之ヲ折リ取リ（此際杭ニ遠キ方ヲ手ハ固ク線ヲ保持シ杭ニ近キ方ヲ手ソミニテ折斷スルヲ可トス）其長キ方

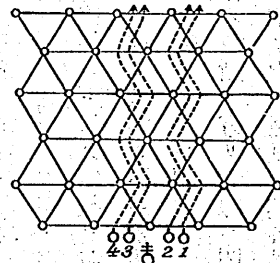
各兵卒ハ第四圖ノ如ク杭脚ニ位置シ一番（二番）ハ杭ノ右側二番（四番）ハ其左側ニ於テ先ニ杭脚ニ在ル鐵線ヲ杭ニ近ク（約〇米三〇）静ニ鐵條鉄ニテ挾ミ之ニ切缺ヲ設ケ次テ兩手ヲ以テ切缺部ニ於ケル線ヲ兩

ノ線ノ一端ヲ成ルヘク杭ヨリ遠キ位置ニ於テ地中ニ挿入シ短
 キ方ノ線ノ端末ハ成ルヘク敵方ニ向テ之ヲ折リ屈ケ此ノ如
 シ一條毎ニ下部ノ鐵線ヲ截斷ス次ヲ稍々上體ヲ起シ同様ニ上
 部ノ鐵線ヲ截斷シ更ニ前方ノ杭側ニ移リテ同ニテ作業ヲ復行
 シ鐵條網ノ後縁ニ到ル

鐵線ノ截斷ニ方リ太線ニ關聯スル細線ハ先ツ太線ト同一ノ方
 法ニ依リ之ヲ截斷シ其各端末ヲ遊動セサル如ク太線又ハ杭ニ
 纏絡スヘシ又圖上^A_B等縦方向ノ鐵線ハ必スシモ之ヲ截斷スル
 ヲ要セサルコトアリ此場合ニ在リテハ一番、二番（三番、四
 番）ハ杭ノ一側クミシ鐵線ヲ截斷シテ前進スルモウチ

鐵條物ノ破壞並通過ニ關スル作業 鐵條物ノ破壞

第五圖



第二法

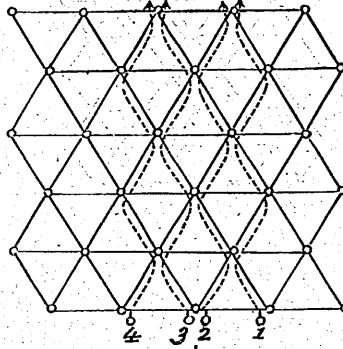
此方法ニ依ルトキハ杭ノ一側ニ於テ概ネ歩兵ノ一列側面縦隊ヲ通過セシムルコトヲ得ヘシ

障物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障物ノ破壊

二十

各兵卒ハ第五圖ノ如ク兩杭ノ中央ニ位置シ一、二番、三番（三番、四番）ハ鐵條缺ヲ使用シ先ツ第一杭列ノ太線間ニ緊張シアル細線ヲ截斷シ第一法ト同一ノ要領ニ依リ之ヲ處置シ次テ一番（三番）ハ兩杭ノ略中

圖 六 第



中央ニ於テ下部ノ太線ヲ截斷シ其右遊端ヲ右方ノ杭側ニ排擠シ

(要スレバ之ヲ杭ニ

纏絡シ或ハ杭ニ近ク

其端末ヲ地面ニ挿入

ス)ニ番(四番)ハ一

番(ニ番)ニ助力シ鐵

線ヲ截斷スルヤ其左

遊端ヲ取り之ヲ左方

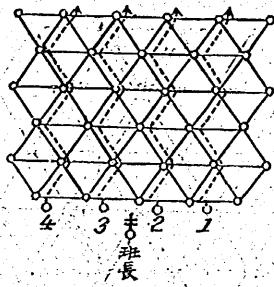
ノ杭側ニ排擠ス次テ

同様ニ逐次上部ノ太

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

三十一

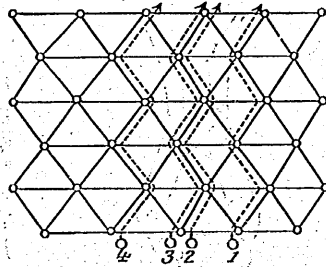
第七圖



障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞 三十二

線ヲ截斷排擠シ更ニ前方ニ
 移リテ同一ノ作業ヲ復行シ
 鐵條網ノ後縁ニ到ル
 此方法ニ依ルトキハ兩杭ノ
 中間ニ於テ概ネ歩長ノ二對
 側面縱隊ヲ通過セシムルコ
 トヲ得ベシ
 狀況ニ依リテ第六圖乃至
 第八圖ノ方法ヲ用ザルモト
 ナリ

第八圖

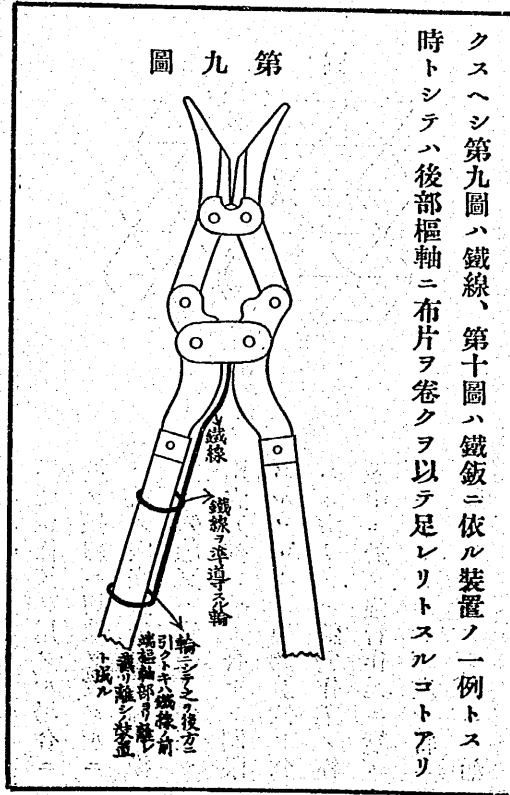


障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

二十三

二號鐵條缺ヲ用フル場合ニ
 於テ鐵線ニ切缺ヲ設クルニ
 ハ豫メ鐵條缺後部樞軸ノ後
 方ニ鐵線又ハ鐵釘ヲ振装シ
 適宜及部ノ嚙ミ合セテ制限
 スルヲ可ト不但此裝置ヲ爲
 スニ方リテハ隱密作業ノ經
 過中ニ於テ強行作業ニ變ス
 ヘキコトアルヲ願慮シ特ニ
 其裝脫ヲ容易ナラシムル如

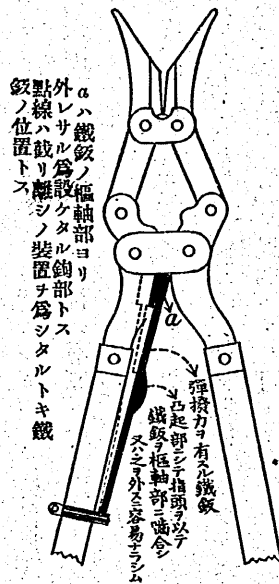
第九圖



クスヘシ第九圖ハ鐵線、第十圖ハ鐵鋏ニ依ル装置ノ一例トス
 時トシテハ後部樞軸ニ布片ヲ卷クヲ以テ足レリトスルコトアリ

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

第十圖



障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

第二十五 器具ニ依ル鐵條網ノ強行破壞ハ概ネ前條ノ如ク兵卒ヲ配置シテ作業セシムヘシ但特ニ剛膽機敏ニ動作シ鐵線ハ切缺ヲ設クルコトナク迅速ニ之ヲ截斷スルモノトス又有刺鐵線ニ在リテハ第六圖又ハ第八圖ノ如ク杭ノ兩側ニ於テ鐵線ヲ截斷スルヲ可トス

長大ナル突擊器材ヲ運搬セントスルカ如キ場合ニ在リテハ斧、鋸等ヲ用ヒテ杭ヲ伐倒若ハ鋸斷シ又植杭堅固ナラサルモノハ太キ網ヲ數杭ニ纏結シテ之ヲ曳倒スルヲ可トス。

第二十六 電流ヲ通スル鐵條網ハ爆藥ニ依リ破壞スルヲ通常トスト雖其構造簡易ナルモノハ器具ヲ用ヒ破壞スルコトアリ此場

合ニ在リテハ開設スヘキ突撃路ノ兩側ヨリ外方少クモ各一米〇
 ○ノ所ニ於テ先ツ電流ヲ地絡セシメタル後破壊スルモノトス
 電流ヲ地絡セシムルニハ鐵條網ノ深サヨリモ稍、長キ十四番乃
 至十六番銅線ノ一端ニ地棒（十字鍬或ハ圓匙ノ鐵部等モ亦之ヲ
 應用スルコトヲ得）ヲ他端ニ重錘ヲ結著シタルモノヲ携行シ先
 ツ地棒ヲ成ルヘク鐵條網ノ前縁ニ接近シテ深ク地中ニ植立シ次
 テ鐵條網ノ上部ヲ越エテ其ノ前方ニ重錘ヲ投擲シ且絶縁體ノ桿
 （「エポナイト」等ニテ製スルカ又ハ木桿ニ護謨管等ヲ嵌裝ス）ヲ
 以テ地絡線ヲ悉ク電流ヲ通スル導線ニ密接セシムヘシ
 地面ノ導通良好ナルトキハ第三十七圖ニ示ス電流鐵條網偵察具

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

二十七

ヲ用ヒテ電流ヲ地絡セシメ得ルコトアリ、
前項ノ設備終レハ鐵線ヲ截斷ス但鐵條缺ハ必ス絶緣體ノ柄ヲ有
スルモノヲ用ヒ又兵卒ニハ護謨製手套及護謨製靴ヲ穿用セシム
ルヲ可トス

此作業ニ於テ特ニ注意スヘキハ重錘投擲ノ瞬時ニ於テ速ニ兩手
ヲ離シ決シテ再ヒ線身ニ觸接セサルコト及縦ヒ絶緣良好ナリト
思惟スルモ紊リニ身體ヲ鐵線等ニ觸レシメサルコト之ナリ

爆藥ニ依ル破壊

第二十七 爆藥ニ依ル鐵條網ノ破壊ニ於テモ亦隱密法ト強行法
トノ二アリ而シテ其方法ニ於テハ兩者異ナル所ナシト雖隱密法

ニ在リテハ其動作ヲ靜肅ニシ成ルヘク音響ヲ發セサル如ク特ニ
注意スルヲ要ス

第二十八 障礙物破壊筒ニ依リ鐵條網ヲ破壊スルニハ通常下士
一名兵卒若干名（破壊筒ノ長サ毎二米〇〇ニ付一名ノ兵卒ヲ配
當ス）ノ一班ヲ以テス
班長ハ兵卒ヲ一列ニ集メ番號ヲ附シ携持スヘキ破壊筒ト點火後
後退スヘキ位置トヲ指示シ左ノ號令ヲ下ス

持場へ

各兵卒ハ破壊筒ノ頭部ヨリ番號ノ順序ニ位置シテ之ヲ携持ス但
最後ノ兵卒ハ點火用器材ヲモ携フ

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

二十九

破壊筒ノ携持確實ナルヲ認ムルヤ班長ハ之ヲ率キテ前進シ鐵條網ノ前縁ニ達ス次テ班長ハ破壊筒ヲ挿入スヘキ位置ヲ指示シ記號ヲ用ヒ或ハ低聲ニ左ノ號令ヲ下シテ作業ヲ實施セシム

掛
レ

各兵卒ハ協力シ鐵條網ノ下部ニ於テ勉メテ杭脚ニ近ク且鐵條網帶ニ直交スル如ク破壊筒ヲ其全深ニ互リ挿入スヘシ
破壊筒ノ裝置終レハ最後ノ兵卒ハ班長ノ指示ニ依リ直ニ之ニ點火シ各兵卒ト共ニ班長ノ誘導ニ依リ所定ノ位置ニ後退スヘシ
破壊筒ハ又滑車ヲ利用シ之ヲ裝置スルコトヲ得ヘシ此場合ニ在リテハ通常下士一名兵卒若干名(破壊筒ヲ保持スル爲兵卒三名

ヲ用ヒ又鋼索ヲ牽引スル爲破壊筒ノ長サ一米五〇乃至二米〇〇
 ニ付約一名ノ比ヲ以テ兵卒ヲ配當ス但土地ノ状態ニ依リ牽引困
 難ナルトキハ適宜兵卒ヲ増加スルモノトスノ一班ヲ以テス一
 番ハ徑約〇米〇一五長サ約三米〇〇ノ麻綱及徑約〇米〇〇五乃
 至〇米〇〇六ニシテ其位置ヨリ鐵條綱ニ至ル距離ノ約二倍半ノ
 長サヲ有スル鋼索(中央ニ前方滑車ヲ貫通シ又其一端末ニ結節
 ヲ附シ之ヲ破壊筒尾筒ヒトウジツコウ縦溝内ニ挿入シ且二枚麻絲ヲ以テ管頭部
 ヲ鋼索ニ結束シ他端ハ後方滑車ニ之ヲ貫通ス)ニ貫通セル前方
 滑車竝點火用器材ヲ携ヘテ鐵條綱ニ向ヒ靜肅ニ前進ス此際二番
 及三番ハ破壊筒ヲ保持シ其他ノ兵卒ハ後方滑車ニ貫通セル鋼索

ヲ保持シ徐々ニ之ヲ繰リ出スモノトス而シテ一番ハ鐵條網ノ前縁ニ達セハ杭脚ニ麻網ヲ結著シテ之ニ前方滑車ヲ鉤ス但植杭堅固ナラサルモノニ在リテハ二杭脚ニ麻網ノ兩端ヲ結著シ其中央部ニ滑車ヲ鉤スルヲ可トス

前項ノ設備終レハ四番以下ノ兵卒ハ徐々ニ鋼索ヲ牽引シ破壊筒ヲ推進セシム此際二番及三番ハ其前進ヲ容易ナラシムル如ク之ヲ保持シ破壊筒既ニ其位置ヲ經過スルニ至レハ鋼索ノ牽引ヲ補助スルモノトス破壊筒前進シ鐵條網下ニ進入セントスルヤ鋼索ト破壊筒トヲ連結セル麻絲ハ前方滑車トノ摩擦ニ依リ自ラ截斷セラレ破壊筒ノミ獨リ前進スルニ至ル此際一番ハ要スレハ其前

進方向ヲ規正ス

破壊筒所望ノ位置ニ裝置セラルルヤ一番ハ班長ノ指示ニ依リ直ニ點火シ所定ノ位置ニ後退ス

長キ破壊筒ヲ推進セシムル場合ニ在リテハ其長サ約一〇米〇〇毎ニ二枚麻絲ヲ以テ鋼索ニ結著スルヲ可トス

此裝置ニ於テ鋼索牽引ノ際摩擦ニ依リ生スル音響ヲ防止スル爲メ鐵條網杭ニ結著スヘキ麻網ハ水ニ浸シ且之ニ鉤スヘキ前方滑車ハ鐵輪ニシテ木框ノモノヲ用フルヲ可トス又後方滑車ノ支點ニハ通常臥木ヲ用フ

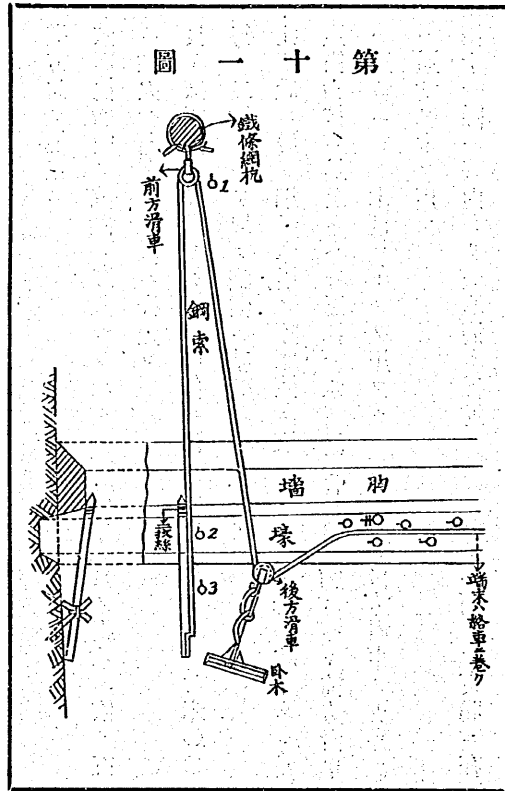
第十一圖ハ壕内ヨリ破壊筒ヲ推進セル一例トス而シテ夜間ニ在

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

三十三

1045

第十圖



障物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障物ノ破壊

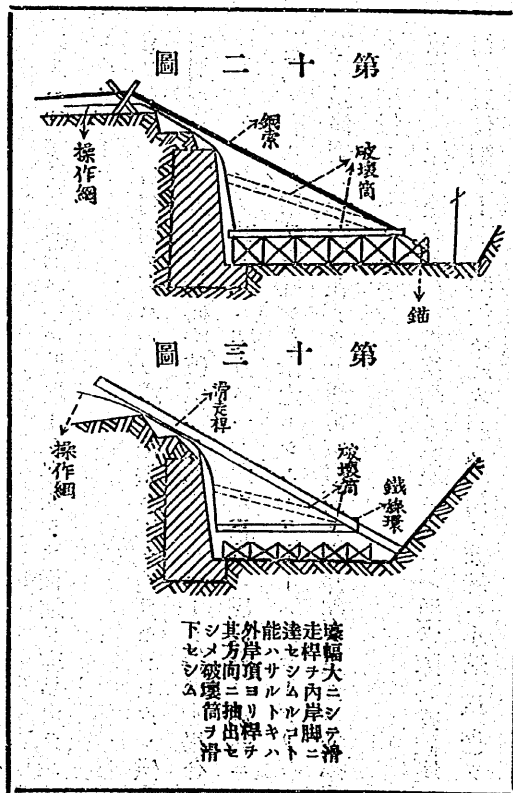
三十四

リテハ破壊筒ノ通過スヘキ胸牆上ヲ穿開シテ推進ヲ容易ナラシムルヲ可トス

第二十九 防禦網ヲ有スルカ或ハ掩體ニ依リ掩蔽セラレタル鐵條網ニシテ下方ヨリ障礙物破壊筒ヲ挿入スルコトヲ得サル場合ニ在リテハ之ヲ其上部ニ裝置スヘシ之カ爲特ニ鐵條網ノ前縁ニ輻輳ヲ有スル架ヲ設置シテ滑走セシムルヲ利トスルコトアリ

電流鐵條網ノ爆破ニ在リテハ通常破壊筒ヲ鐵條網ノ上部ニ投擲シテ裝置スルモノトス

第三十 深キ壕底ニ在ル鐵條網ヲ破壊スルニハ通常障礙物破壊筒ヲ鐵條網ノ上部ニ裝置ス之カ爲破壊筒ノ前端ニ小網(鐵線)ヲ



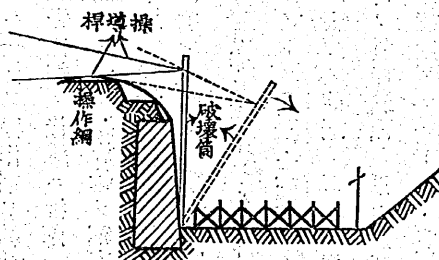
障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障碍物ノ破壊

其後端ニ一條ノ操作網ヲ結著シ又別ニ鋼索若ハ強綱ヲ附シタル
 小錨ヲ鐵條網ノ後縁ニ投擲シテ之ニ鈎シ其他端ヲ固ク保持シ次
 テ鐵線ヨリ成ル螺旋輪ヲ鋼索ニ鈎シテ之ヲ嵌メタル後破壞筒前
 端ノ小綱(鐵線)ニ結著シ鋼索ト操作網トノ操作ニ依リ之ヲ壕底
 ニ滑下セシムルカ(第十二圖)或ハ錨及鋼索ニ代テアルニ一本ノ
 滑走桿(滑棒ヲ應用スルコトヲ得)ヲ用ヒ之ヲ滑下セシメテ裝置
 スルモノトス(第十三圖)

其他破壞筒ノ前端ニ二本ノ操導桿ヲ又其後端ニ一條ノ操作網ヲ
 附シ之ヲ外岸斜面ニ沿ヒテ垂直ニ降下セシメタル後操導桿ヲ推
 進シテ裝置スルコトアリ(第十四圖)

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

第四十圖

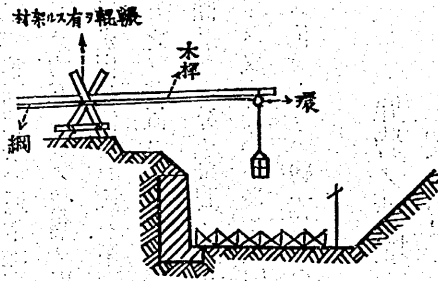


障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

三十八

第三十一 爆薬筒ニ依リ鐵條
 網ヲ破壊スルニハ總テ障礙物
 破壊筒ニ依ル方法ヲ準用スヘ
 シ但爆薬筒ニ依リ一擧ニ爆破
 シ得ヘキ鐵條網ノ深サハ約一
 〇米〇〇ヲ限度トシ又爆薬筒
 ノ長サハ鐵條網兩端ノ爆破ヲ
 確實ナラシムル爲其深サヨリ
 少クモ一米〇〇長カラシムル
 モノトス而シテ之ヲ裝置スル

圖 五 十 第



障碍物ノ破壊竝通過ニ關スル作業 障碍物ノ破壊

三十九

ニハ時トシテ二箇ノ爆藥筒
ヲ用ヒ先ツ一爆藥筒（推進
ヲ容易ナラシムル爲其後端
ニ一桿ヲ結著ス）ヲ鐵條網
ノ前半深ニ裝置シ次テ他ノ
爆藥筒ヲ之下端々相接スル
如ク後半深ニ裝置シテ齊發
スルヲ可トスルコトアリ
爆藥筒ニ依リ爆破スヘキ鐵
條網ノ幅ハ約四米〇〇トス

第三十二 集團裝藥ハ通常壕底ニ在ル鐵條網ノ破壞ニ使用スルモノニシテ約五〇呎ノ裝藥ヲ用ヒ第十二圖及第十三圖ニ準シ鋼索又ハ滑走桿ヲ使用シ或ハ第十五圖ニ示ス要領ニ依リ鐵條網ノ中央部ニ之ヲ裝置スヘシ但裝藥ハ其取扱ヲ容易ナラシムル爲數箇ノ集團裝藥ニ分チ數回ニ之ヲ滑下セシメテ同一場所ニ裝置スルヲ可トス又各裝藥ハ最モ堅固ニ之ヲ捆包スルヲ要ス此方法ニ依ルトキハ約一〇米〇〇平方ノ鐵條網ヲ破壞シ得ルモノトス

鹿砦ノ破壞

要旨

第三十三 鹿岩ノ破壊ニ用フル器具及爆薬ハ主トシテ鐵條鉄、

鉋、鋸、鎌、斧、手斧及障碍物破壊筒若ハ爆薬筒トス

第三十四 鹿岩ノ破壊ハ以下示スモノノ外鐵條網ノ破壊ニ準據

スルヲ要ス而シテ其破壊ハ強行法ニ依ラサルヘカラサルコト多
シ

器具ニ依ル破壊

第三十五 器具ニ依リ樹枝鹿岩ノ強行破壊ヲ行フニハ通常下土

一名兵卒四名ノ一班ヲ以テス

班長ハ兵卒ヲ一列ニ集メ番號ヲ附シ之ニ鐵條鉄ト鉋、鎌、鋸、

斧、手斧(晝間ハ鉋、夜間ハ鋸又ハ鉋ヲ可トス)ノ内一若ハ二ヲ

障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障碍物ノ破壊

携ヘシム

班長ハ兵卒ヲ率キテ前進シ鹿砦ノ前縁ニ達セハ破壞スヘキ區域ヲ指示シ逐次左ノ號令ヲ下シテ作業ヲ實施セシム

持場へ

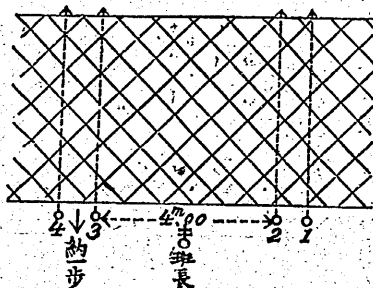
兵卒ハ第十六圖又ハ第十七圖ノ如ク位置シテ伏臥ス

掛レ

第一法

一番、二番(三番、四番)ハ第十六圖ノ如ク位置シ先ツ鐵條鉄ヲ以テ鐵線ヲ截斷シ次テ其他ノ器具ヲ以テ地ニ近ク樹枝ヲ伐リ取リ(此際逐次樹枝中ニ進入シ前縁ニ向ヒ伐リ倒スヲ可ト

圖六十第



番ハ此開口部ニ進入シ之ヲ基礎トシテ左右ニ通路ヲ擴張スル

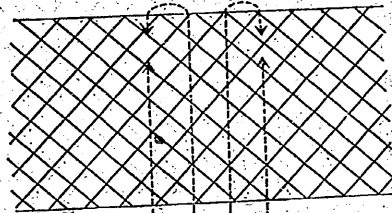
ス)之ヲ右(左)方樹枝内ニ排除シツツ互ニ協同シ幅約一米五〇ノ通路ヲ開設シ鹿岩ノ後縁ニ到ル

第二法

一番、二番ハ第十七圖ノ如ク併列シテ位置シ互ニ協同シテ幅約一米五〇ノ開口ヲ設ケ次テ適宜ノ時期ニ於テ三番、四

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

第七十圖



特別ノ場合ニ在リテハ鹿砦ノ基脚ヲ掘開シ横材ヲ扛起シテ樹枝

障物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障物ノ破壊

四十四

モノトス但一、二、三番ノ伐
 リ取りシ樹枝ハ三番、四番
 ラシテ之ヲ左右ニ排除セシ
 メ又一番、二番ハ鹿砦ノ後
 縁ニ達セハ三番、四番ノ作
 業ヲ援助スルモノトス
 此方法ニ依ルトキハ幅約三
 米〇〇ノ通路ヲ開設シ得
 シ

ヲ除去シ又其固定堅固ナラサルモツハ横材ニ綱ヲ結著シ之ヲ曳引シテ一舉ニ樹枝列ヲ除去シ得ルコトアリ

第三十六 器具ニ依リ隱密ニ樹枝鹿岩ヲ破壊スルニハ櫛ネ前條ノ要領ニ依リ作業スヘシ但各兵卒ハ通常鐵條鉋及鋸等ヲ使用シ第十六圖ノ如ク位置シ成シ得ル限リ地ニ近ク且徐々ニ樹枝ヲ鋸斷スルヲ異ナリトス

第三十七 器具ニ依リ樹幹鹿岩ヲ破壊スルニハ先ツ樹枝ヲ伐除シ次テ又杭及横材ヲ除去シ後樹幹ヲ左右ニ排除スヘシ

爆藥ニ依ル破壊

第三十八 爆藥ニ依リ鹿岩ヲ破壊スルニハ第二十七乃至第三十

隙罅物ノ破壞並通過ニ關スル作業 隙罅物ノ破壞

四十五

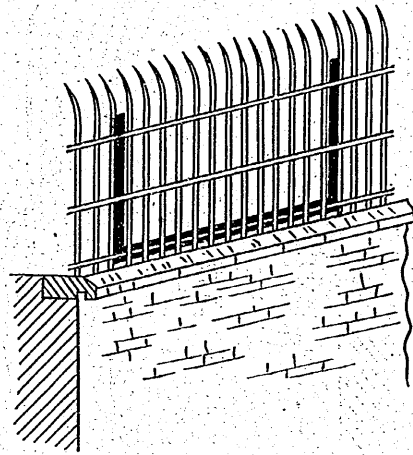
二ニ示セル鐵條網ノ破壊法ヲ準用スヘシ但平地ニ在ル鹿砦ニ對シ障礙物破壊筒若ハ爆藥筒ヲ使用スル場合ニ在リテハ急造轆轤ヲ使用シ或ハ鹿砦ノ前縁ニ在ル樹枝ノ交叉部ニ托シテ之ヲ推進スルヲ可トス又爆藥筒ニ在リテハ適宜藥量ヲ減少シテ其中徑ヲ小ナラシメ以テ挿入ヲ容易ナラシムルヲ可トスルコトアリ此場合ニ在リテハ必要ニ應シ其數箇ヲ相接近セシメ平行ニ裝置シ以テ之ヲ破壊威力ヲ增加スルヲ要ス

鐵柵、狼筈、拒馬、地雷等ノ破壊

第三十九 鐵柵ハ之ニ近接シテ作業シ得ルトキハ通常障礙物破壊筒若ハ爆藥筒ヲ使用シ其二箇ヲ約四米〇〇乃至五米〇〇ヲ間シ

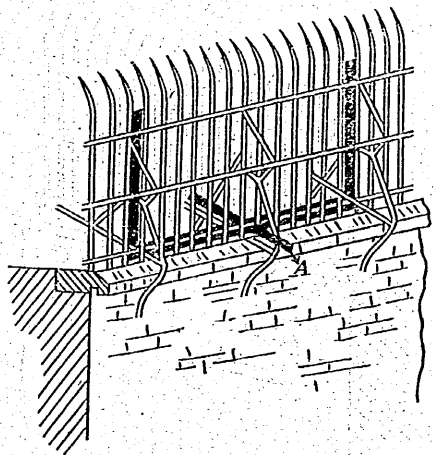
第十圖

障礙物ノ破壊竝通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊



テ横材ニ觸接スル
 如ク垂直ニ又別ニ
 一箇ヲ脚ニ沿ヒテ
 水平ニ裝置シ（第
 十八圖）一齊ニ之
 ヲ爆破スヘシ但鐵
 柵ニ横支柱ヲ有ス
 ルモノハ別ニ破壊
 筒若ハ爆藥筒Aヲ
 添置スルモノトス

第十圖



障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壊

四十八

(第十九圖)

内岸脚等ニ在ル
 鐵柵ニシテ近接
 困難ナルトキハ
 集團裝藥ヲ用ヒ
 壕底ニ在ル鐵條
 網破壊ノ要領ニ
 準シテ之ヲ柱脚
 ニ裝置スル世ノ
 トス

第四十

狹窄ハ掩覆通過(第五十二參照)ニ依ルヲ可トス然レトモ之ニ鐵條網ヲ併設セルモノニ在リテハ先ツ其前縁ニ在ル數竅上ノ鐵線ヲ截斷シテ土囊若ハ束囊等ヲ用ヒ竅杭ヲ埋沒シ次テ竅

内ニ入り障礙物破壞筒若ハ爆藥筒ヲ

第二十圖ノ如ク鐵條網ノ杭脚ニ裝置

シテ之ヲ爆破スヘシ而シテ此方法ニ

依ルトキハ鐵條網ヲ破壞スルト同時

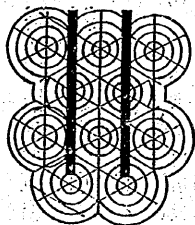
ニ附近ノ土壤ヲ飛散シテ若干竅底ヲ

埋填スルコトヲ得ルモノトス

第四十一

拒馬ハ障礙物破壞筒及其他ノ爆藥ヲ用ヒ成ルヘク比

第二十圖



障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

隣ニ拒馬ノ連結部ニ近ク裝置シテ之ヲ爆破スヘシ
 拒馬ハ又斧、鋸及鐵條鋏等ヲ用ヒ其幹材及鐵線ヲ截斷シ若ハ比
 隣ニ拒馬ヲ連結スル鐵鎖、鐵線等ヲ截斷シテ之ヲ除去スルカ或
 ハ網ヲ纏結シ之ヲ曳引シテ排除スルコトヲ得
 第四十二 地雷ハ埋填ノ痕跡或ハ假裝ノ狀態等ニ依リ發見ノ準
 據ヲ得サルトキハ十字鋏若ハ鉤ヲ有スル桿等ヲ使用シ綿密ナル
 注意ヲ以テ地雷設置ノ疑アル地域ヲ搜索スヘシ而シテ其位置ヲ
 發見セハ速ニ導火線ヲ截斷シ且裝藥ハ勉メテ之ヲ誘發スルヲ可
 トス
 地雷設置ノ疑アル地域ニシテ之ヲ無效ナラシメタルカ或ハ地雷

ナキコトヲ認メタルトキハ直ニ其位置若ハ區域ノ安全ナルコトヲ標示スヘシ又地雷アルモ之カ發火防止ノ處置ヲ施シ難キトキハ之カ危險ヲ標識スヘシ

第四十三 小杭及具釘板ハ爆藥ヲ用ヒ之ヲ爆破スルヲ有利トス然レトモ時トシテ器具ヲ用ヒ之ヲ破壊若ハ除去スルコトアリ

第四十四 柵 圍壁及門扉ハ概ネ鐵柵ノ破壊法ニ準シ爆藥ヲ用ヒテ之ヲ爆破スヘシ然レトモ其構造堅固ナラサルモノハ器具ヲ用ヒ之ヲ破壊スルコトヲ得

第四十五 氾濫ハ堰堤ヲ破壊スヘシ堰堤ヲ破壊スルニハ圓匙、十字鍬、大槌及斧等ヲ用ヒ或ハ集團裝藥ヲ裝置シテ之ヲ爆破ス

ヘシ

側防設備及外岸壁ノ破壊

第四十六 側防設備及外岸壁ハ突撃作業ニ依リ之ヲ破壊スルコト通常困難ナリト雖特ニ構造ノ簡易ナルモノニ在リテハ其表面ニ爆薬ヲ装置シテ之ヲ破壊スルコトヲ得

側防設備ハ又所要ノ時機ニ於テ破壊シ能ハサルトキハ之ヲシテ一時無效ナラシムルヲ以テ忍ハサルヘカラス此場合ニ在リテハ^{シヤット}爆薬筒ヲ銃眼若ハ砲門ヨリ挿入シ其燃燒ノ爲生スル毒瓦斯ニ依リ守兵ヲ窒息セシムルモノトス
 爆薬筒ノ構造及機能ハ本教範附録ニ依ルヘシ

第四十七 表面ニ裝置スル爆藥ニ依リテ側防設備ヲ破壊スルニハ其構造ニ依リ一若ハ數箇ノ集團裝藥ヲ用ヒ外岸側防設備ニ在リテハ壕底ニ降り或ハ外岸頂ヨリ爆藥ヲ垂下シテ適宜ノ位置ニ之ヲ裝置シ内岸側防設備ニ在リテハ壕底ニ降り或ハ第十三圖及第十五圖ニ示セル要領ニ依リ爆藥ヲ其壁脚ニ裝置スルモノトス

第四十八 煙藥筒ヲ銃眼若ハ砲門ニ挿入スルニハ豫メ之ヲ挿入桿ニ結著シ壕底ニ降り或ハ外岸頂ニ於テスルモノトス而シテ其挿入ハ勉メテ之ヲ迅速ナラシメ且挿入ト共ニ直ニ曳索ヲ曳キテ點火スヘシ但壕底ニ降りテ行フ場合ニ在リテハ銃眼若ハ砲門ノ直下ニ於テ成ルヘク其射界ヲ避ケ又外岸頂ヨリスル場合ニ在リ

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ破壞

五十三

障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作業 障碍物ノ掩覆通過 五十四

テハ之ニ任スル兵卒ノ腰ニ網ヲ結著シテ他端ヲ確保シ兵卒
ノ壕内ニ墜落スルヲ豫防スルコトニ注意スルヲ要ス

同一ノ銃眼又ハ砲門ニ對シ數箇ノ煙藥筒ヲ連續使用スヘキ場合
ニ在リテハ適宜之ヲ補給スルコトニ注意スヘシ

第四十九 外岸壁ノ破壊ハ外岸側防設備ニ於ケルト略、同一ノ
要領ニ依ル

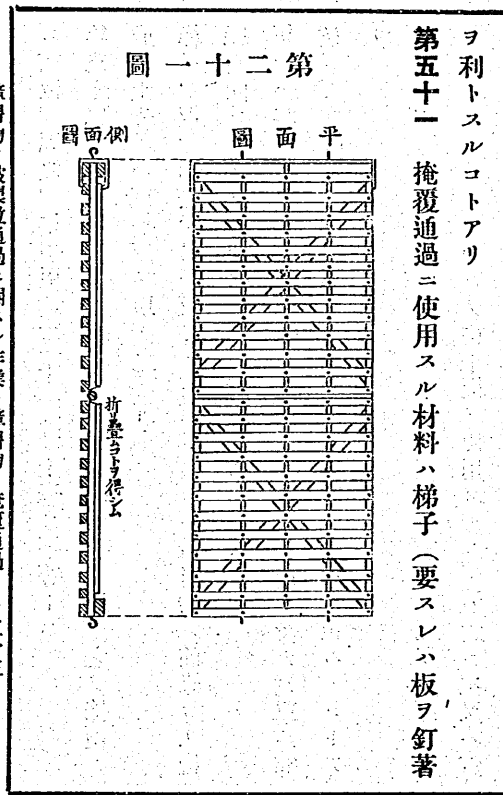
第二章 障碍物ノ掩覆通過

第五十 障碍物中狼狽、小杭、具釘板等ハ掩覆シテ通過スルヲ
常トス鐵條網及鹿砦等モ亦其構造ニ依リテハ掩覆シテ通過スル

圖一十二第

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 障礙物ノ掩覆通過

五十五



ヲ利トスルコトアリ
第五十一 掩覆通過ニ使用スル材料ハ梯子(要スレハ板ヲ釘著

ス)、板、編條、格子板(第二十一圖)土囊及囊等トス
 第五十二 狼狽ハ梯子、板、編條、格子板等ヲ以テ之ヲ掩覆シ
 或ハ土囊若ハ束藁等ヲ以テ之ヲ埋填ス
 梯子、板、編條、格子板等ヲ使用スルニハ障物ノ前縁ヨリ後
 縁ニ向ヒ逐次之ヲ連接シテ敷置スルモノトス
 狼狽ハ時宜ニ依リ突撃部隊ノ掩蔽物トシテ利用スルカ爲單ニ窠
 杭ノミヲ除去シ或ハ窠杭ノ高サマテヲ埋填スルニ止ムルコトア
 リ
 第五十三 小杭及具釘板ハ格子板、板ヲ釘著セル梯子及厚板等
 ヲ以テ之ヲ掩覆ス而シテ格子板ヲ使用スルトキハ之ニ杭又ハ釘

ノ高サニ應スル架材ヲ取り付ケ置クヲ可トス

第五十四 低鐵條網、足喰鐵條網及低キ鹿岩等ハ主トシテ編條、格子板、梯子、板等ヲ以テ之ヲ掩覆ス而シテ此種ノ鐵條網ニ在リテハ土囊及藁等ヲ用フルヲ利トスルコトアリ

普通鐵條網及鹿岩モ亦前項ノ要領ニ依リ之ヲ掩覆シ得ルコトアリ但此場合ニ在リテハ昇降ヲ容易ナラシムル爲導板ヲモ併用スルヲ可トス

第三章 突撃器材ノ用法

要 則

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

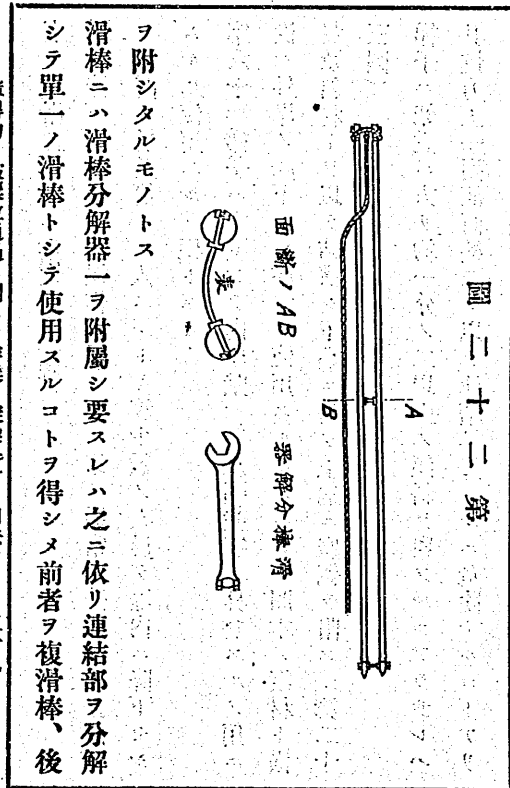
五十七

- 第五十五 突撃器材ハ主トシテ外壕ノ通過ニ使用スルモノトス
- 第五十六 突撃器材ノ使用ニハ多數ノ人員ヲ要スルモノアリ且最モ機敏ナル動作ヲ要求スルヲ以テ各兵卒ヲシテ特ニ緊密ナル協同ノ下ニ作業ヲ實施スルコトニ慣熟セシムルヲ要ス
- 第五十七 突撃器材ノ使用ヲ練習スルニ方リテハ危害ヲ豫防スル爲要スレハ外壕底ニ砂、藁等ヲ敷置スヘシ

突撃器材

- 第五十八 制式突撃器材ハ滑棒、梯子、携帶橋及昇降網トス
- 第五十九 滑棒ハ突撃部隊ノ外壕降下用ニ供スルモノニシテ複棒ノ兩端及中央ヲ三箇ノ繫桿ニテ連結シ下端ニ鎗ヲ上端ニ麻網

圖 二十二 第



障碍物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

五十九

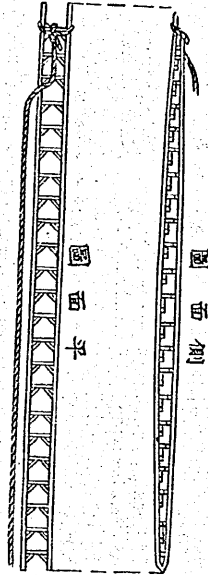
者ヲ單滑棒ト稱ス(第二十二圖)

單滑棒ハ輕量ニシテ操作容易ナルヲ以テ通常側防設備ノ銃眼若
ハ砲門ニ燻藥筒ヲ挿入スルトキ等少數ノ人員ヲ壕内ニ降下セシ
ムル爲使用スルヲ便トス

第六十 梯子ハ主トシテ内岸壁、柵及圍壁等ヲ昇登スルノ用ニ
供シ外岸ノ降下ニモ亦之ヲ使用スルモノニシテ四本ノ縦材ト横
材及斜材トヲ以テ結構シ下端ニ鐮ヲ上端ニ麻網ヲ附ス(第二十
三圖)

梯子ハ架設ニ方リ約一分ノ二以上ノ傾斜ヲ與フルニアラサレハ
其抗力上一列側面縱隊ヲ以テ連續昇降スルニ危險ナルコトアリ

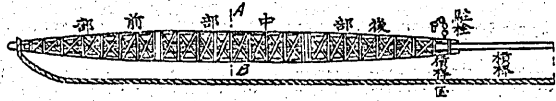
圖三十二第



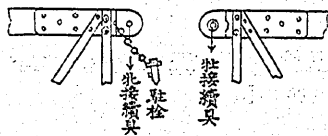
第六十一 携帶橋ハ之ヲ外壕ニ架設シ突撃部隊ノ通過ニ供スルモノニシテ兩側ニ在ル各二本ノ臥材ヲ垂直材及斜材ヲ以テ魚形ニ構成シ且横材ヲ以テ結合シ橋床板ヲ敷置シタルモノナリ携帶橋ニハ長携帶橋及短携帶橋ノ二種アリ長携帶橋ハ前部、中

隙隙物ノ破壊竝通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

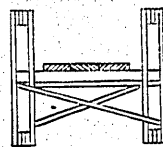
圖 四 十 二 第



圖面側ノ具續接



面斷、AB



1073

部及後部ノ三橋體ヨリ成リ短携帶橋ハ中部ヲ省キ前部及後部ノ二橋體ヨリ成ル而シテ各部ヲ連結スルニハ臥材ノ端末ニ取附ケアル牝牡接續具ヲ嚙ミ合ハセ駐栓ヲ挿ス

後部兩側ニハ檣桿ヲ挿入スル爲各二箇ノ檣桿具ヲ具ヘ内各一箇ノ匡ニハ檣桿ヲ固定スル爲駐栓ヲ附ス(第二十四圖)

携帶橋ニハ左ノ屬品ヲ附ス

檣桿 携帶橋ノ架設及撤收ヲ容易ナラシムルノ用ニ供スルモノニシテ其一端ヲ携帶橋兩側ノ檣桿匡ニ挿入シ駐栓ヲ以テ之ヲ駐ムルモノトス

曳網 携帶橋架設ノ際橋體ノ方向ヲ規正シ又撤收ノ際之ヲ曳ク

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法 六十三

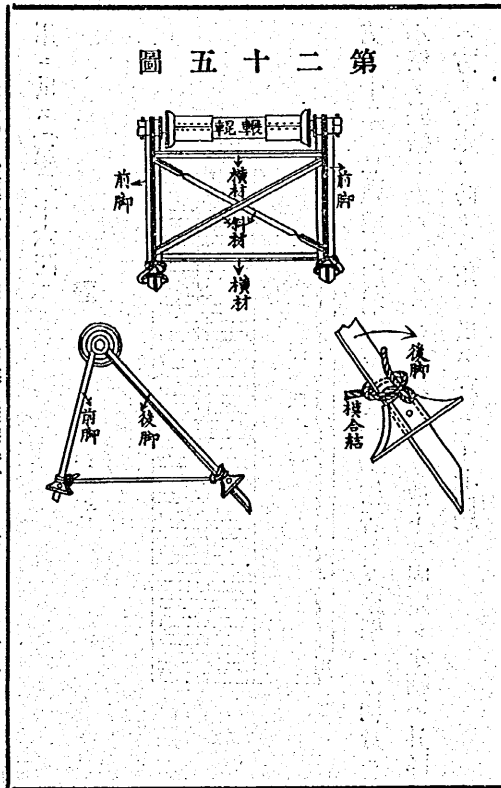
ノ用ニ供スルモノニシテ橋體ノ頭部兩側ニ各一條ヲ結著スルモノトス
 輓轉架 木製ノ輓輦ヲ有スル架ニシテ架設ノ際携帶橋ヲ推進セシムルノ用ニ供ス架ノ脚ハ前後各二本ヨリ成リ前脚ハ横材及斜材ニ依リ互ニ連結セラル前後兩脚ハ二條ノ綱ニテ豫メ其下端ヲ連絡(綱ノ一端ヲ滑縮結^{スロキムスビ}ニテ前脚ニ結著シ他端ハ使用ノ際ニ於ケル兩脚ノ開角ヲ顧慮シ適宜ノ長サヲ存シテ後脚ニ模合結^{モキヒムスビ}ニテ結著ス)シ使用ニ方リ適度ニ兩脚ノ開角ヲ節スルコトヲ得(第二十五圖)
 導板^{ゾウダン} 携帶橋ヲ架設シタル後橋床ノ後端ニ鉤シテ斜坂ト爲スノ

1026

圖 五 十 二 第

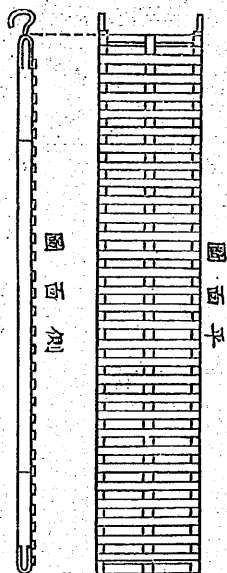
障 碍 物 ノ 破 壞 並 通 過 ニ 關 ス ル 作 業 突 撃 器 材 ノ 用 法

六 十 五



用ニ供ス(第二十六圖)

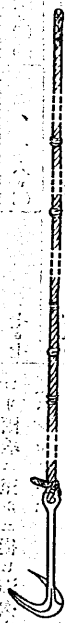
圖 六十一



第六十二 昇降網ハ麻綱ノ一端ニ 錨ヲ 結著シ又麻綱ニハ網身ニ
 小綱ヲ纏結シタルモノニシテ錨ハ之ヲ地上ニ固定シ小綱ハ昇降
 ニ方リ滑走ヲ防クノ用ニ供ス(第二十七圖)

圖 七 十二 第

昇降網ハ輕量ニシテ隱密ノ設置容易ナルヲ以テ外壕偵察者ノ使
用ニ供スルヲ使トス



第六十三 突撃器材ハ應用材料ヲ用ヒテ之ヲ急造スルコトヲ得
然ルトキハ概ネ左ノ要領ニ依ルヘシ
應用滑棒ハ降下スヘキ壁ノ高サヨリ約二米〇〇長キ強直ナル木
桿ヲ左表ノ如ク圓削シ其下端ニハ成シ得レハ鑄ヲ附シ又其上端
ヨリ約〇米二〇ノ所ニハ孔ヲ穿テ之ニ桿ト略ニ同長ナル巾徑約

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用海

六十八

○米〇一ノ網ヲ貫通ス而シテ複滑棒ニ在リテハ兩桿ノ中間ニ至
乃至三箇ノ繫材ヲ施シ且上端ノ網ハ繫材ニ之ヲ結著スルモノト
ス
時トシテ竹ヲ以テ木桿ニ代用スルコトアリ此場合ニ在リテハ其
末口ニハ木桿ト同一ノ中徑ヲ有セシムヘシ

全長(米)	兩端ノ中徑(釐)	中央部ノ中徑(釐)	備考
九・〇〇	六・三	八・三	中徑ハ最小限ヲ承テ而シテ中央部ヨリ兩端ニ至ルニ從ヒ漸次中徑ヲ減スルモノトス
七・〇〇	六・〇	七・七	
五・〇〇	五・五	六・八	
三・〇〇	四・八	五・八	

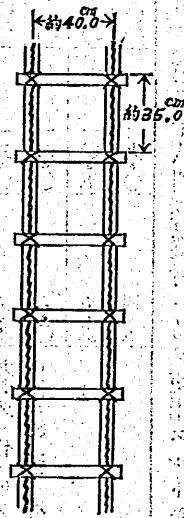
應用梯子ハ通過スヘキ壕ノ内、外岸壁若ハ鐵柵、圍壁等ノ高さヨリモ一米五〇乃至二米〇〇長ク且左表ノ如キ木材ヲ縱材トシ之ニ約〇米三五ヲ間シテ橫材ヲ釘著シ要スレハ二連ノ網ヲ以テ其連結部ヲ結束シ上端ニハ梯子ト略、同長ナル中徑約〇米〇一

全長 (米)	縱材ノ横断面 (厘米)		備
	幅	厚	
九・〇〇	一三・〇	六・五	丸太又ハ竹子ヲ用フルトキハ表記ノ中徑ニ約二割ヲ増加スヘシ
七・〇〇	一三・〇	六・〇	
五・〇〇	一〇・五	五・五	
三・〇〇	九・〇	四・五	

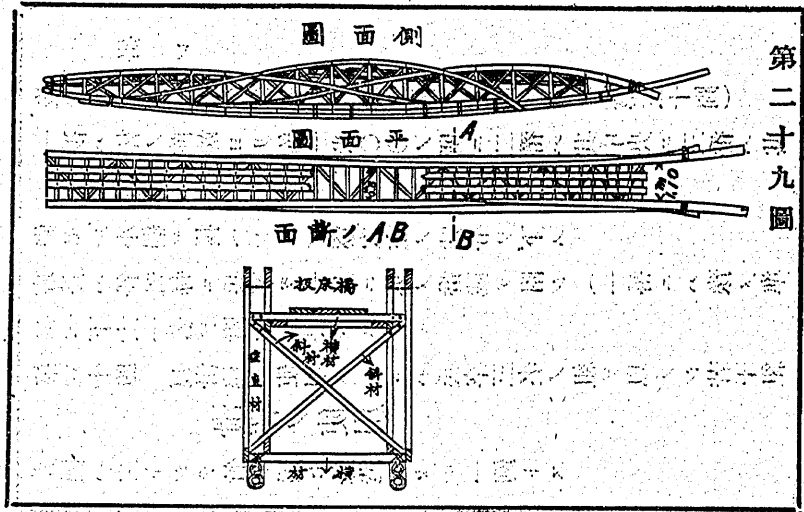
ノ網ヲ附ス(第二十八圖)若縱材ニ竹ヲ使用スルトキハ輕量且靱

障幕物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法 六十九

圖八十二第



強ナルモノヲ製作スルヲ得ヘシ而シテ其構造ハ木材製ト同一ナ
 ルニ網ヲ以テ横材連結部ヲ結束スルコト常ニ必要ナリ
 應用携帶橋ハ木材竹及鐵線等ヲ用ヒ制式携帶橋ニ準テ構造
 シ通常單簡ナル輾轉架ヲ併用スルモ可トス但竹製携帶橋ノ使用
 ニ方リテハ其破損ヲ防テ爲輾轉架ヲ併用セサルヲ可トス第三十



陸軍省ノ建築部ニ關スル作業ノ記録ニ於テノ記述

1083

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

七十二

九圖ハ主トシテ竹ヲ用ヒ急造シタル一例トス

滑棒ノ使用

第六十四 複滑棒ヲ使用スルニハ兵卒三名ノ組ヲ以テシ若干組
毎ニ下士一名ヲ附シ班長トス

班長ハ各組毎ニ兵卒ヲ二列ニ集メ番號ヲ附シ（一番ニハ豫メ準
備セル小綱ヲ携ヘシム）逐次左ノ號令ヲ下ス

持場へ

一番ハ棒ノ前端ヨリ約一米〇〇ノ所ニ二番ハ其中央ニ三番ハ其
後端ヨリ約一米〇〇ノ所ニ於テ棒ノ左側ニ到ル（第三十圖）

掛レ

第三十圖



一番乃至三番ハ先ツ兩手ヲ以テ滑棒ノ表面ヲ手前ニ在ラシムル
 如ク堅ニ起シ右臂ヲ滑棒ノ上方ヨリ廻ラシ下方ノ棒ヲ握リテ右
 腋下ニ抱ク(三番ハ網ト共ニ)
 班長ハ設置ノ場所或ハ方向ヲ指示シ左ノ號令ヲ下シテ作業ヲ實
 施セシム

前

兵卒ハ駈歩ヲ以テ前進シ外岸頂ニ達セハ滑棒ノ前端ヲ外岸頂附

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器械ノ用法 七十三

近ニ在ラシムル如ク之ヲ地上ニ平置シ一 番ハ棒ノ左側後端ニ於テ三番ノ前方ニ二番ハ其右側後端ニ移リ三番ト協力シテ棒ノ後端ヲ扛ケ略、壕縁ニ直交スル如ク之ヲ壕内ニ降下ス次テ一番ハ第六十七ニ示ス要領ニ依リ滑棒ヲ使用シテ壕底ニ降り二番ト協力シテ其傾斜ヲ約一分ノ三ニ規正シ直ニ小綱ヲ下部繫桿ニ結著シ滑棒ノ裏側ニ在リテ跪坐若ハ仰臥シ小綱ヲ緊張シテ其脚ヲ保持ス三番ハ斜堤上ニ伏臥シ綱ヲ緊張シ其一端ヲ左(右)腋下ヨリ背部ヲ經テ右(左)腋下ニ廻ラシテ之ヲ保持ス二番ハ三番ノ傍ニ伏臥シ豫備トナル

第六十五 單滑棒ヲ使用スルニハ兵卒二名ノ組ヲ以テシ一番ハ

其前端二番ハ其後端ニ於テ各端末ヨリ約一米〇〇ノ所ヲ右腋下ニ抱キ前進シテ外岸頂ニ達スニ番ハ棒ノ前端ヲ外岸頂ニ托シニ番ハ其後端ヲ扛ケ協力シテ略、壕縁ニ直交スル如ク之ヲ壕内ニ降下シ其傾斜ヲ約一分ノ四ニ規正シニ番ハ複滑棒ノ使用ニ於ケル三番ノ如ク網ヲ保持シニ番ハ二番ノ傍ニ伏臥シ豫備トナル

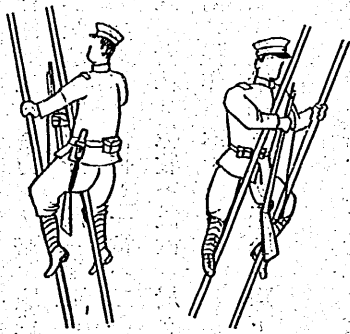
第六十六 滑棒ノ撤收ハ設置ニ於ケルト同一ノ人員ヲ用ヒ概ネ之ト反對ノ操作ニ依ルモノトス

第六十七 複滑棒ニ依リ壕底ニ降下スルニハ概ネ左ノ要領ニ依ルヘシ

兵卒ハ銃ヲ右手ニ持チ先ツ滑棒ノ右側ニ出テ次テ敵ニ背面ヲ左

障物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

第三十一圖



淺キ壕ニ在リテハ敵方ニ面シテ背部ヲ棒ニ托シ兩足ヲ以テ棒ヲ
外側ヨリ挟ミ銃ヲ右手ニ持テ左手ヲ以テ棒ヲ握リ滑下スルヲ便

手ヲ以テ棒ヲ握リ右前臂
ノ内側ヲ棒ニ托シ兩股及
兩足ノ内側ニテ棒ヲ挟ミ
稍、上體ヲ起シテ壕底ニ
滑下ス(第三十一圖)
銃ヲ肩ニ掛ケルトキハ兩
手ヲ以テ棒ヲ握ルモツト
ス

障礙物ノ破壞竝通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

七十六

第三十二圖



トスルコトアリ

第六十八 單滑棒ニ依リ壕底

ニ降下スル場合ニ在リテハ通

常左手ノ前臂ト左脚ノ脛トヲ棒ニ鉤シテ滑下ス(第三十二圖)

梯子ノ使用

第六十九 梯子ヲ使用スルニハ兵卒四名ノ組ヲ以テシ若干組毎

ニ下士一名ヲ附シ班長トス

班長ハ各組毎ニ兵卒ヲ二列ニ集メ番號ヲ附シ逐次左ノ號令ヲ下

ス

持場へ

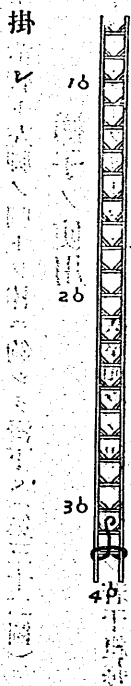
障礙物ヲ被覆並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法 七十七

680T

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法 七十八

一番ハ梯子ノ前端ヨリ約一米〇〇ノ所ニ二番ハ其中央ニ三番ハ
其後端ヨリ約一米〇〇ノ所ニ於テ梯子ノ左側ニ到リ四番ハ其直
後ニ位置ス(第二十三圖) 脚ニ並ニ滑棒ヲ用ニテ踏込メテ、腹
ニ掛ケテ、

第二十三圖



掛
一番乃至三番ハ先ツ兩手ヲ以テ梯子ノ表面ヲ外方ニ在ラシムル
如ク堅ニ起シ複滑棒ノ携持法ト同一ノ要領ニ依リ右腋下ニ抱ク
(三番ハ網ト共ニ)

班長ハ設置ノ場所或ハ方向ヲ指示シ左ノ號令ヲ下シテ作業ヲ實施セシム
 兵卒ハ駆歩ヲ以テ前進シ外岸頂ニ達セハ二番乃至三番ハ復滑棒ノ設置ト同要領ニ依リ梯子ヲ壕内ニ降下シ其傾度ヲ修正シタル後一番ヨリ逐次梯子ヲ下リテ壕底ニ到リ一番ハ梯子ハ後方ニ二番ハ其左側ニ三番ハ其右側ニ四番ハ網ヲ保持シテ前方ニ位置シ一番乃至三番ハ兩手ヲ以テ梯子ノ縦材若シテ横材ヲ握リ梯子ヲ直立シタル儘之ヲ扛擧シ四番ハ網ヲ操作シテ其轉倒ヲ防キ互ニ協力シテ内岸側ニ運搬シ之ヲ内岸壁ニ架シ傾斜ヲ約一分以三ニ規

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法 七十九

1691

障物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

八十

正ス（内岸壁ヲ有セサルモノニ架スル場合ニ在リテハ梯子ヲ内岸ニ托ス）次テ各兵卒ハ跪坐若ハ伏臥シテ梯子ノ兩脚ヲ保持ス要スレバ三番、四番ハ梯子ノ上端附近ニ位置シ梯子若キハ綱ヲ保持ス

第七十 梯子ノ撤收ハ設置ニ於ケルト同一ノ人員ヲ用ヒ概ネ之ト反對ノ操作ニ依ルモノトス

第七十一 梯子ニ依リ壕ノ内、外岸ヲ昇降スルニハ概ネ左ノ要領ニ依ルヘシ

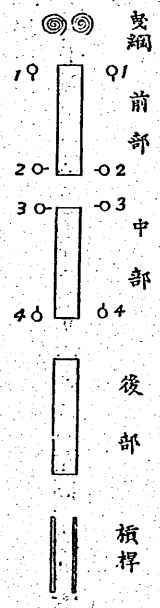
兵卒ハ銃ヲ右手ニ持チ或ハ之ヲ肩ニ掛ケ梯子ニ面シ片手又ハ兩手ニテ縦材或ハ横材ヲ握リテ昇降ス

携帶橋ノ使用

第七十二 携帶橋ハ下士二名兵卒八名ノ一班ヲ以テ之ヲ組立ツルモノトス

班長ハ先ツ成ルヘク平坦ナル土地ヲ選ヒ第三十四圖ノ如ク器材ヲ整頓シタル後兵卒ヲ二列ニ集メ番號ヲ附シ逐次左ノ號令ヲ下シテ之ヲ組立テシム

第三十四圖



障物ノ破壊或通過ニ關スル作業 突擊器材ノ用法

1093

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

八十二

持場へ

兵卒ハ第三十四圖ニ示ス順序ニ依リ前列兵ハ左側、後列兵ハ右側ニ就ク

掛レ

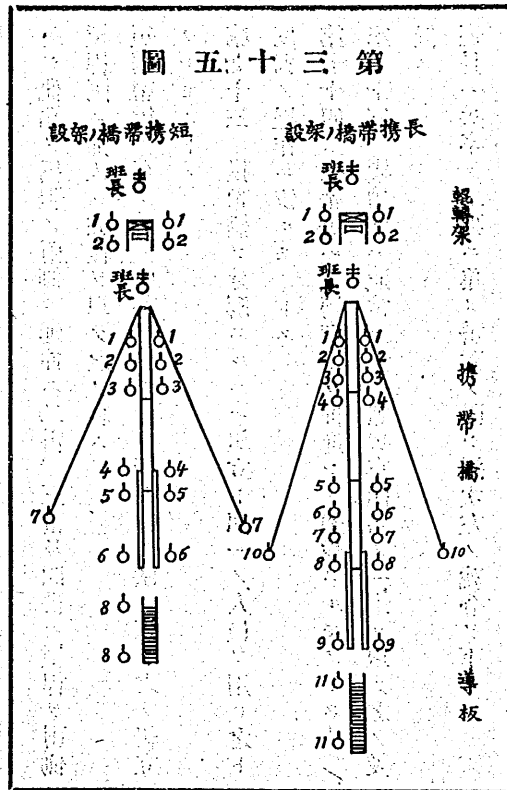
一、二番及四番ハ協力シテ牝牡接續具ヲ啗合シ三番ハ上部及下部ノ駐栓ヲ順次ニ確實ニ其孔ニ嵌装シ前部及中部ヲ接合ス此際一、二番及四番ハ班長ノ指示ニ依リ其端末ヲ扛起シ或ハ低下シテ接合ヲ容易ナラシム次テ二番及三番ハ中部ト後部トノ接續部ニ四番ハ後部ノ後端ニ移リ前ト同法ニ依リ中部及後部ヲ接合ス橋體ノ接合終レハ一、二番ハ曳綱ノ一端ヲ舟手結^{カゴムスビ}ニテ頭部横材ニ結

著シ他端ヲ橋體ノ兩側ニ延伸ス二番、三番及四番ハ槓桿ヲ兩側
 槓桿匡ニ挿入シ駐栓ヲ以テ之ヲ駐ム
 短携帶橋ニ在リテハ中部ヲ除キ前ト同一ノ方法ニ依リ之ヲ組立
 ツルモノトス
 第七十三 携帶橋ヲ分解スルニハ組立ト同一ノ人員ヲ用ヒ之ト
 反對ノ操作ニ依ルモノトス
 第七十四 携帶橋ハ輾轉架上ヲ推進シテ架設スルモノトス
 第七十五 輾轉架ハ通常下士一名兵卒四名ノ一班ヲ以テ之ヲ設
 置ス
 班長ハ兵卒ヲ二列ニ集メ番號ヲ附シ逐次左ノ號令ヲ下ス

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

八十三

圖五十三第



障物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

9601

持場へ

兵卒ハ第三十五圖ニ示ス順序ニ依リ前列兵ハ左側、後列兵ハ右側ニ就ク

掛レ

一番ハ右(左)手ヲ以テ輓轉架ノ前脚下部横材ヲ内側ヨリ二番ハ右(左)手ヲ以テ後脚ヲ外側ヨリ携持ス

班長ハ設置ノ場所或ハ方向ヲ指示シ左ノ號令ヲ下シテ之ヲ設置セシム

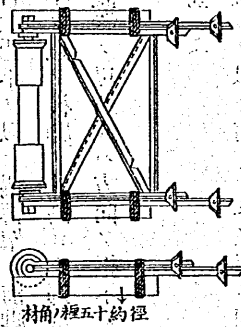
前へ

兵卒ハ駆歩ヲ以テ前進シ外岸頂ニ到リ班長ノ指示スル位置ニ架

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

八十五

第三十六圖



交シ且勉メテ水平ナルヲ要ス是携帶橋推進ノ際架脚ヲ轉倒シ或ハ推進方向ノ不正ヲ來ササラシメンカ爲ナリ若土質柔軟ナルトキハ架脚ニ適宜枕材ヲ結著スルヲ可トス
 斜堤頂ニ上斜面急ナルカ若ハ内岸頂斜堤頂ヨリ甚シク低キトキ

ヲ置キ一番ハ前脚ヲ二番ハ後脚ヲ適度ニ開キ跪坐若ハ伏臥シ兩手ヲ以テ確實ニ之ヲ支持ス
 輾轉架ハ常ニ之ヲ堅固ニ設置シ其輾轉ハ橋軸ト直

ハ携帶橋ノ推進ニ方リ其頭部著シク高起シ其降下ニ方リ強キ激突ヲ生シ往々橋體ヲ破損スルコトアリ此場合ニ在リテハ輻轉架ノ脚ヲ疊ミ輻轉軸ノ兩端ニ徑約〇米二五ノ枕材ヲ置キ脚ト共ニ結束シ平置シテ之ヲ使用スルヲ可トス(第三十七圖) 輻轉架ヲ外岸頂ニ設置スルニ方リ架ノ上面斜堤頂ヨリモ低キカ若ハ場所狹隘ニシテ架ノ設置困難ナル場合ニ在リテハ架ノ後脚ヲ前方ニシ前脚ヲ斜堤内斜面ニ托スルヲ可トスルコトヲ以テ又輻轉架設置ノ爲土工ヲ施ササルヘカラサルトキハ所要ノ人員及器具ヲ増加スルヲ要ス

第七十六 携帶橋ヲ架設スルニハ下士二名兵卒二二名(短携帶

障導物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

八十七

橋ニ在リテハ兵卒一六名トス以下之ニ倣フノニ班ヲ以テス
班長ハ兵卒ヲ二列ニ集メ番號ヲ附シ逐次左ノ號令ヲ下ス

持場へ

各兵卒ハ第三十五圖ニ示ス順序ニ依リ前列兵ハ左側、後列兵ハ
右側ニ就ク但十一番(八番)ハ前後列兵共ニ左側ニ位置ス

掛レ

一番乃至九番(一番乃至六番)ハ内側ノ手ヲ以テ縦材ヲ外側ノ手
ヲ以テ斜材ヲ保持シ橋ヲ略シ水平ニ提ケ十番(七番)ハ曳綱端ヲ
取り十一番(八番)ハ導板ヲ右腋下ニ抱ク
班長ハ架設ノ場所或ハ方向ヲ指示シ左ノ號令ヲ下シテ之ヲ架設

セシム

前

兵卒ハ携帶橋ヲ正シキ方向ニ保持シ駆歩ヲ以テ前進シ既ニ設置シアル輻轉架ノ後方ニ至リ一番乃至九番(一番乃至六番)ハ協力シテ携帶橋ノ頭部ヲ輻轉架上ニ托シ力ヲ加ヘテ一齊ニ之ヲ推進ス橋體前進シ二番乃至四番(二番乃至三番)ハ其定位置ニ在リテ推進スルコト能ハサルニ至レハ速ニ槓桿ノ位置ニ移リテ之ヲ推進シ以テ其頭部ヲシテ内岸頂若ハ堡壘ノ外斜面ニ到達セシム但此際ニ於ケル頭部ノ激突ヲ避クル爲推進ノ終ラントスル頃ヨリ漸次力ヲ減スルヲ要ス而シテ此推進中十番(七番)ハ橋ノ推進ヲ

障礙物ノ破壞並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法 八十九

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

九十

妨害セサル如ク曳綱ヲ適度ニ緊張シテ適宜橋ノ方向ヲ規正スル
 由トヲ勉ムヘシ又槓桿ヲ保持スルモノハ頭部ノ内岸ニ到達スル
 迄テ之ヲ下方ニ壓スルモ頭部ヲ甚シク高起セシメザル如ク特ニ
 注意シ且橋ノ後端ヨリ前方約二米〇〇(約二米五〇)以内ノ間ヲ
 輾轉架土ニ支ヘ強ク壓下スルトギハ槓桿及其取附部ヲ破損スル
 ノ虞アルヲ以テ推進ヲ終ル比ホヒニハ漸次壓下ノ力ヲ減少スル
 ヲ要ス

橋體ノ架設終レハ携帶橋架設班ハ槓桿ヲ稍々上方ニ扛舉シ輾轉
 架設置班ノ二番ハ脚ノ綱ヲ解キ脚ヲ開キテ架ヲ地上ニ平置シ携
 帶橋架設班ハ橋體ヲ地上ニ置ク時トシテ輾轉架ヲ其儘ト爲シ置

クラ可トスルコトアリ次テ十一番(八番)ハ導板ヲ橋體ノ後端ニ
 鉤シテ斜坂ト爲シ二番ハ橋ヲ渡リテ對岸ニ到リ前列兵ハ左側、
 後列兵ハ右側ニ在リテ橋ノ頭部ヲ支持ス若前端ノ位置ヲ規正ス
 ルノ必要アルトキハ作業ノ程度ニ應シ所要ノ人員ヲ對岸ニ到ラ
 シムヘシ

第七十七 携帶橋ハ其構造複雑ナルヲ以テ之カ使用ニ方リ特ニ
 強キ激突若ハ墜落等ノ爲破損セシメサルコトニ深ク注意スルヲ
 要ス

第七十八 携帶橋ノ使用ヲ練習スルニハ先ツ平地又ハ淺キ壕ニ
 於テ之ヲ行ヒ十分ニ其要領ヲ豫習シタル後外壕ニ於テ實施スル

障礙物ノ破壊並通過ニ關スル作業 突撃器材ノ用法

九十一

ヲ可トス而シテ携帶橋ノ使用ニ方リ其破損ヲ防ク爲頭部ノ支點ト爲ルヘキ場所ニ藁類ヲ置キ緩衝ノ設備ヲ行フヲ要ス

第七十九 携帶橋ノ撤收ハ架設ニ於ケルト同一ノ人員ヲ用ヒ概ネ之ト反對ノ操作ニ依ルモノトス但兵卒中八名(六名)ハ槓桿ノ端末ヲ保持シテ之ヲ水平ニ曳キ其他ノ兵卒ハ全部曳綱ヲ取り協力シテ一舉ニ之ヲ後方ニ曳キ橋長ノ約三分ノ二ヲ引キ寄せタルトキヨリ漸次架設ノ場合ニ於ケル如ク位置シテ後方ニ運搬ス

第八十 携帶橋ヲ通過スル部隊ハ一列側面縦隊ヲ以テ歩ヲ揃フルコトナク駈歩ヲ以テ通過スルモノトス

昇降網ノ使用

第八十一 昇降網ヲ使用スルニハ一名ノ兵卒ヲ以テス兵卒ハ網ヲ縮トシテ肩ニ掛ケ錨ヲ提ケテ前進シ外岸頂ニ達セハ先ツ錨爪ヲ地中ニ挿入シ要スレハ足ヲ以テ十分ニ之ヲ壓定シ網ヲ外壕内ニ投下シ次テ錨上ニ伏臥シ兩手ヲ以テ強ク之ヲ胸下ニ壓下シテ保持ス

昇降網ニ依リ壕底ニ降下スルニハ網ヲ手繰リ兩足ニテ交互ニ外岸壁ヲ壓シツツ降下ス

昇降網ニ依ル壕ノ昇登法ハ概ネ降下ノ要領ニ同シ

第二篇 突撃路ノ開設

第一章 一般ノ要領

要則

第八十二 突撃路ヲ開設スルニハ障礙物及側防設備ヲ偵察シテ其現況ヲ明ニシ敵情、目的及明暗ノ程度ヲ顧慮シ之ニ適合スル如ク開設スヘキ突撃路ノ數、場所、時期竝方法ヲ決定シ次テ作業隊ヲ部署シ器材ヲ整備スル等十分ニ之カ諸準備ヲ完了シ時機來ラハ直ニ實施ニ著手スルモノトス

第八十三 突撃路開設ノ位置ハ其作業ヲ容易ナラシムル爲戰術

上ノ要求ニ反セサル限リ我砲彈等ノ爲若干破壊セラレアルカ或
ハ構造比較的脆弱ナルカ若ハ近接容易ナル點等ニ選定スルヲ可
トス

第八十四 一突撃路ノ幅ハ突撃部隊ヲシテ成ルヘク廣キ正面ヲ
以テ通過シ得ル如ク勉メテ大ナラシムルヲ要ス少クモ四列側面
縦隊ヲ以テ通過シ得シムル爲三米〇〇ヲ下ルヘカラス

第八十五 突撃路ハ突撃前ニ之ヲ開設スルヲ要ス然レトモ狀況
之ヲ許ササルトキハ突撃ト同時ニ之ヲ行ハサルヘカラス

第八十六 突撃路ノ開設ハ夜暗、濃霧等ヲ利用シ成ルヘク敵ノ
不意ニ乘シテ隱密ニ之ヲ實施スルモノトス然レトモ狀況之ヲ許

突撃路ノ開設 一般ノ要領

九十五

ササル場合ニ在リテハ我掩護射撃ノ下ニ或ハ突撃ト同時ニ之ヲ強行セサルヘカラス

第八十七 突撃路ノ開設特ニ突撃器材ノ使用ハ之カ必要ノ機ニ先チ十分ニ之ヲ豫習シ又突撃部隊ハ突撃路ノ通過法ヲ練習スルコト極メテ緊要ナリ

第八十八 突撃路ノ開設ニ方リテハ作業隊ト突撃縦隊トノ間ニハ確實ナル連繫ヲ保持シアルヲ要ス

第八十九 突撃路ノ開設ニ任スル者ハ作業ノ實施ヲ容易ナラシムル爲武器ヲ携行セサルコトアリ然レトモ著シク作業ノ實施ニ妨ケナク且自衛ノ爲特ニ必要ナルカ又ハ作業後直ニ突撃ニ參與

スル場合ニハ必ス武器ヲ携行スルモノトス

第九十 突撃作業成功ノ要訣ハ一ニ周密ナル偵察、準備ト剛膽
機敏ナル實施トニ存ス苟クモ之カ缺陷ニ起因シ突撃ヲシテ悲惨
ナル結果ニ陥ラシムルカ如キコト斷シテアルヘカラス

偵察

第九十一 障礙物及側防設備ノ状態ヲ偵察スルニハ斥候ヲ派遣
シ夜暗、濃霧、砲撃間及其他敵ノ不意ニ乘シ偵察スヘキ目標ニ
接近シテ其状態ヲ實視セシムルヲ要ス而シテ其偵察ハ作業實施
ノ經過中ト雖絶エス之ヲ行ハシムルヲ可トス

第九十二 斥候ヲ派遣スルニハ先ツ敵陣地ノ築城ヲ判斷シテ偵

突撃路ノ開設 一般ノ要領

九十七

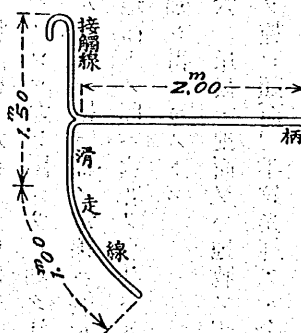
察スヘキ要點ヲ定メ之ニ基キ成ルヘク單一ナル任務ヲ授クヘシ
此際既ニ偵知シ得タル事項ト雖其偵察ニ關係ヲ有スルモノハ併
セテ之ヲ指示スルヲ要ス

同時ニ同一方面ニ數組ノ斥候ヲ派遣スルトキハ其數、人員及任
務ノ概要ヲ知悉セシメ置クコト特ニ緊要ナリ

第九十三 斥候ハ成ルヘク常ニ同一方面ノ偵察ヲ擔任セシメ且
此斥候ハ將來該方面ノ突撃作業ニ任スル部隊ヨリ選出スルヲ可
トス

第九十四 斥候ニハ通常將校ヲ長トスル少數ノ人員ヲ充ツルヲ
可トス然レトモ狀況ニ依リ敵ノ視聽ヲ避クル爲單獨者ヲ用フル

第三十七圖



シテ鐵條網ニ於ケル電流ノ流否ヲ偵知スルノ用ニ供シ竹又ハ木製ノ柄ノ一端ニ接觸線(通常六番鐵線ヲ用フ)及滑走線(屈撓性

コトアリ
第九十五、斥候ヲ偵察ス
目的ニ依リ昇降網、垂球、
測量用網、鐵條鉞、羅針、
電流鐵條網偵察具及要ス
レハ携帯電燈等ノ照明具
ヲ携行スルモノトス
電流鐵條網偵察具ハ主ト

突撃路ノ開設 一般ノ要領

TTTT

突撃路ノ開設 一般ノ要領

百

ヲ與フル爲細線數條ヲ綯合シタルモノヲ用フ)ヲ附シタルモノ
(第二十七圖)ニシテ斥候ハ護謨製手套ヲ穿用シ地上約一米〇〇
ノ高サニ於テ柄ヲ水平ニ、接觸線ヲ垂直ニ保持シ滑走線ヲ地ニ
滑走セシメツツ之ヲ踏マサル如ク注意シテ前進ス若電流鐵條網
存在スルトキハ接觸線ノ電線ニ觸ルル瞬時ニ於テ其接觸部及滑
走線ト地面トノ間ニ火花ヲ發生スルヲ以テ電流ノ流通シアルコ
トヲ偵知シ得ルモノトス

第九十六 斥候ハ地面又ハ地物ノ現色ニ類似セル被服ヲ著シ若
ハ假裝ヲ施シ顔面、手竝光輝アル金屬等ヲ色染シ或ハ絨布ヲ以
テ靴ヲ包ミ若ハ草鞋ヲ穿ツ等敵ノ注意ヲ避クル一切ノ手段ヲ盡

スコト必要ナリ

第九十七 斥候ハ仔細ノ注意ヲ以テ隱密ニ行動スルヲ要ス之カ
爲噴火孔、土地ノ小起伏、畝及穀草ノ根株等縦ヒ些少ノ地區地
物ト雖之カ利用ヲ怠ルヘカラス又敵ニ通視セラレ易キ地域ハ成
ルヘク之ヲ避クルヲ要ス然レトモ已ムヲ得サルトキハ低キ姿勢
ヲ以テ迅速ニ通過スヘシ若敵ヨリ照明セラレ或ハ射撃ヲ被ルト
キハ直ニ伏臥シ能ク其狀況ヲ窺ヒタル後徐クニ行動ヲ始ムヘシ
又敵ノ出撃部隊ノ退却ニ尾行スルトキハ偵察ノ目的ヲ達スルニ
便ナルゴトアリ

第九十八 偵察ヲ強行セントスルトキニ於テハ敏捷果敢ニ動作

突撃路ノ開設 一般ノ要領

百一

1113

突撃路ノ開設 一般ノ要領

百二

シ短時間ニ其目的ノ達成ヲ圖ルモノトス但此場合ニ於テモ成ル
ヘク地區地物ヲ利用シ且低キ姿勢ヲ以テ動作シ敵彈ヲ避クルコ
トニ注意セサルヘカラス

第九十九 斥候ハ偵察ニ方リ障礙物附近ノ土地及障礙物ノ構造
ニ注意シ且輕舉ニ障礙物ニ觸ルルコトヲ避クヘシ是往々警報裝
置ニ依リ敵ニ發覺セラレ或ハ地雷、電流等ノ爲危害ヲ被ルコト
アルヲ以テナリ

第一百 斥候ハ通常障礙物ノ現狀ニ就キ其位置、幅員、種類、線
列ノ數ハ構造及強度等ヲ偵察スルモノニシテ其主要ナルモノニ
就キ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 普通鐵條網ハ、杭ノ種類、形狀、太サ、高サ、間隔、列數、植杭ノ強度及鐵線ノ種類並張線法、固定法其他防禦網、警報裝置並電流通裝置ノ有無
- 電流ヲ通スル鐵條網ハ、通常數條ノ六番又ハ八番鐵線ヲ相平行セシメテ水平ニ張線シ各杭ノ内側ニハ必ス碍子ヲ附シア
ルモノトス
- 二 鹿砦ハ其種類、深サ、高サ、疎密、材料ノ太サ及固定法並張線ノ有無
- 三 外壕ハ一般ノ編成、断面、内、外岸壁ノ構造並側防設備ノ狀態特ニ銃眼及砲門ノ數、構造成シ得レハ之ニ備フル銃

突撃路ノ開設 一般ノ要領

砲ノ種類、壕底及内、外岸ニ於ケル障碍物ノ位置、種類及
幅員竝特種壕断面

其他障碍物監視ノ狀況ヲ偵察スルコト必要ナリ

第一百 斥候ハ特ニ命セラレサルモ成シ得ル限り將來突撃作業
實施ノ場合ヲ顧慮シ其經過路ノ偵察ヲ行ヒ要スレハ敵ニ發見セ
ラレサル如ク標識ヲ設クルヲ可トス

第二百 偵察ノ結果ハ先ツ主要ノ事項ヲ速ニ口上ヲ以テ報告シ
次テ要圖又ハ寫景圖ヲ附シテ詳細ニ記述シ速ニ報告スルモノト
ス而シテ其要項ハ陣中要務令ノ規定ニ從フヘシト雖特ニ尺度ハ
實測セルカ若ハ目測セルカヲ明記スルヲ要ス又報告ニハ單ニ實

視ノ狀況ノミナラス破壊若ハ通過ノ方法、場所及時期等ニ關スル考案ヲモ併セ之ヲ記載スヘシ

偵察者ハ時トシテ適時自ラ歸還シテ報告スルコト能ハサル場合アルヲ願慮シ豫メ定メタル合圖等ニ依リテ之ヲ報告スルヲ可トスルコトアリ

準備

第三百 一 突撃縦隊ノ爲突撃路ヲ開設スルニハ通常一區隊之ヲ擔任スルモノトス

第四百 一 區隊長ハ上級指揮官ヨリ指示セラレタル突撃路ノ場所、程度及方法竝配當セラレタル人員、器材等ヲ願慮シ所要ノ

4111

突撃路ノ開設 一般ノ要領

百六

班ヲ編成スルニハ、通常ノ突撃隊ノ編成ニ依リ、各線ニ一箇ヲ配當スル如ク之ヲ編成スルモノトス。然レトモ突撃縦隊ノ隊形ニ依リ各線ニ數條ノ突撃路ヲ要スルトキハ之ニ應スル如ク所要ノ班ヲ編成シ且要スレハ我損害ヲ補充シテ作業ヲ繼續シ得ル如ク若干ノ豫備班ヲ設クヘシ。各班ノ人員ハ作業ノ種類ニ依リ之ヲ定ムヘシト雖敵ノ視聽ヲ避クル爲成ルヘク少キヲ可トス但特ニ豫備人員ヲ配當スルヲ必要トス又班長及兵卒ニハ成ルヘク該方面ノ偵察ニ加リタルモノヲ充當スルヲ可トス。

突撃作業ノ爲人員ノ部署ハ通常突撃作業用器材整備ノ位置ニ於

テスルモノトス

第一百五 突撃作業用器材ハ周密ナル注意ヲ以テ其ノ機能及抗力ヲ點檢シ使用ニ方リ毫モ支障ナキヲ期セサルヘガラス又其員數ハ作業ノ目的ニ應シ豫メ十分ニ之ヲ整備スルヲ要ス此際特ニ豫備器材ヲ準備スルコト緊要ナリ

第一百六 突撃作業用器材ハ通常突撃陣地又ハ突撃作業實施ノ爲ニ特設セル據點内ニ之ヲ整備スルモノニシテ器材ノ種類、員數及使用ノ順序等ヲ顧慮シ所要ノ置場ヲ設備シ且之ヲ搬出ヲ容易ナラシムル爲斜坂若ハ階段等ヲ設クルモノトス而シテ此等ノ施設ハ敵ノ認識ヲ避クルコトニ深ク注意スルヲ要ス

突撃路ノ開設 一般ノ要領

1119

突撃路ノ開設 一般ノ要領

百八

突撃作業用器材ヲ其置場ニ運搬整置スルニハ敵ノ耳目ニ觸レサル爲成ルヘク夜暗ニ於テ靜肅ニ之ヲ行フヲ要ス長大ナル器材ヲ整置スル場合ニ於テ特ニ然リ而シテ其時期ハ過早ナラサルヲ要ス

實施

第一百七 突撃路開設ノ時機來ラハ區隊長ハ最近ノ障礙物ニ當ルヘキ作業班ヲ率キテ前進シ先ツ第一線列ニ突撃路ヲ開設シ次ニ第二ノ作業班ヲ進メ逐次前方ニ及ホスヘシ此際區隊長ト各班長トハ確實ニ連絡ヲ保持スルコト緊要ナリ

第一百八 隱密法ニ依リ突撃路ヲ開設セントスルニ方リ半途ニ於

テ敵ニ發覺セラレ猛烈ナル射撃ヲ被ルトキハ班長ハ適時強行法ノ實施ヲ命シ兵卒ハ決シテ逡巡スルコトナク其作業ヲ敢行スヘシ又幹部ハ率先シテ勇敢ニ動作シ部下ヲ激勵シテ其ノ任務ノ達成ニ全力ヲ竭スコト緊要ナリ此際班長ハ要スレハ豫備人員ヲ以テ作業手ノ損耗ヲ補ヒ又區隊長ハ豫備作業班ヲ推進シテ作業力ヲ失ヘル若干班ヲ交代シ以テ寸時ト雖作業ヲ中絶セシムヘカラス

第百九 各班ハ既ニ其目的ヲ達成セシトキハ速ニ之ヲ區隊長ニ報告シ尙其位置ニ止マリテ之ヲ完全ナラシムヘシ
區隊長ハ作業ヲ完了セシ各班ヲ逐次後退セシムルヲ通常トスト

突撃路ノ開設 一般ノ要領

百十

雖作業ノ直後ニ於テ突撃ヲ實施スル場合ニ在リテハ作業ノ種類ニ依リ尙其位置ニ止マリテ突撃部隊ノ通過ヲ容易ナラシメタル後之ト共ニ前進セシムルコトアリ

第一百 突撃路ノ開設後直ニ突撃ヲ實行セサル場合ニ在リテハ區隊長ハ監視兵來著スルマテ若干ノ兵員ヲ既ニ開設セル突撃路ノ附近ニ止メテ敵ノ補修作業ヲ妨害スベシ又夜間突撃ヲ實施セシトスルトキハ敵ニ認識セラレサル如ク突撃路ニ到ル経路ヲ標示スヘシ

第一百一 突撃ト同時ニ突撃路ヲ開設スルヲ要スルトキハ作業區隊ハ突撃縦隊ノ先頭ニ在リテ前進シ後方ニ在ル部隊ヲ猛烈カ

ル掩護射撃下ニ於テ前各條ノ要領ニ依リ作業ヲ履行スルハシテ
ス

第一百十二 突撃ノ實施ニ方リ突撃縱隊ニ屬シ其先頭ニ前進スル
作業隊ハ敵ノ補修又ハ急設セル障礙物其他開設作業ノ十分ヲ保
サル部分等ヲ排除シ以テ其突入ヲ容易ナラシムルモノトス

第二章 外壕前ニ於ケル突撃路ノ

開設

第一百十三 外壕前ノ障礙物ハ通常鐵條網、鹿砦等ニシテ此等ノ
障礙物ニ突撃路ヲ開設スルニハ爆藥ニ依ルヲ有利トス然レトモ

突撃路ノ開設 外壕前ニ於ケル突撃路ノ開設

之ヲ有セサルカ或ハ其數少キ場合等ニ在リテハ器具ヲ用ヒテ破壊シ又ハ其構造ニ依リ掩覆シテ之ヲ通過スルモノトス
外壕ヲ有セサル堡壘ノ障碍物ニ突撃路ヲ開設スルニハ本章ノ規定ヲ準用スルモノトス

第一百十四 突撃路開設ノ諸準備ハ**第一百四**乃至**第一百六**ニ依リ實施スルヲ通常トスト雖單簡ニ設備セラレタル敵陣地ニ對シ攻撃作業ニ依ルコトナク一舉ニ攻撃ヲ行フ場合ニ在リテハ攻撃ノ開始ニ先テ遠隔ノ地點ニ於テ之カ諸準備ヲ完了セサルヘカラス
第一百十五 突撃陣地又ハ特設セル壕内ニハ所要ノ器材ヲ整置スルニ十分ナル設備ヲ施スモノニシテ障碍物破壊筒、爆藥筒或ハ

掩覆用梯子等長大ナル器材ハ突撃器材ニ準シテ之ヲ整置スルモ
 ノトス而シテ破壊筒或ハ爆薬筒ヲ用ヒ突撃路ヲ開設スル場合ニ
 在リテハ突撃陣地又ハ特設セル壕内ニ設備シタル搬出路ニ依リ
 挿入シ或ハ直接ニ掩覆ヲ越エテ障碍物ノ上面ニ裝置シ若ハ穹窿
 對壕ヲ掘進シテ障碍物ノ前縁ニ達シ對壕ノ頭部ヨリ挿入ス又器
 具或ハ掩覆材料ヲ用ヒテ突撃路ヲ開設スル場合ニ在リテハ搬出
 路ニ依リテ進出スルヲ通常トス
 破壊筒或ハ爆薬筒ハ又時トシテ障碍物ノ後縁マテ掘進シタル穹
 窿對壕ノ穹窿頂ニ裝置シ地下ヨリ爆破スルコトアリ
 遠隔ノ位置ヨリ發進シテ突撃路ヲ開設セントスル場合ニ於テハ

突撃路ノ開設 外壕前ニ於ケル突撃路ノ開設

百十三

區隊長ハ作業班ヲシテ敵ニ發覺セラルルコトナク地物ヲ利用シテ前進シ且正シク所望ノ作業位置ニ就カシムルコト特ニ緊要ナリ

第百十六 突撃路ハ勉メテ突撃方向ニ沿ヒ眞直ニ開設セラルルヲ要ス

第百十七 突撃路中突撃器材就中携帶橋ノ搬出路ニ供スヘキモノハ特ニ器材ノ使用ヲ容易ナラシムルコトニ注意スルヲ要ス之ヲ爲其開設ハ爆破ニ依ルヲ有利トシ若器具ヲ用フルトキハ勉メテ通路ヲ清掃セサルヘカラス

第百十八 爆薬ニ依リ障碍物ニ突撃路ヲ開設スルニハ障碍物ノ

位置、種類及線列等ヲ顧慮シテ所要ノ班ヲ編成シ之ニ器材ヲ配當ス此際各班ニハ爆藥ノ外向器具ヲモ配當スルヲ要ス
區隊長ハ前項ノ準備終レハ各班ニ破壞スベキ場所及方法ヲ指示シ且爆藥ノ裝置及點火法竝點火後退避ノ位置等ヲ示シタル後第一線列ヨリ前方ニ向ヒ逐次ニ障礙物ヲ爆破セシムルモノトス此際各線列ニ於ケル爆藥ハ勉メテ一齊ニ之ヲ爆發スルモノトス但此場合ニ於テ第二線列以後ノ爆破ハ強行法ニ依ラザルヘカヲアルコト多シ

敵ノ警戒嚴チラサルトキハ一舉ニ各線列ヲ破壞スルカ爲第一線列ノ作業班ヲシテ先ツ器具ニ依リ簡易ナル通路ヲ開設セシメタ

突撃路ノ開設 外壕前ニ於ケル突撃路ノ開設

ル後第二線列ノ作業班ヲシテ之ヲ經テ進出セシメ逐次各線列ニ
 作業班ヲ配置シ爆藥ヲ裝置シ概ネ一齊ニ爆破ヲ行ヒ得ル如ク逐
 次前線列ヨリ點火シテ後退シ得ルコトアリ
 障碍物ノ深サ及各線列ノ距離之ヲ許ストキハ障碍物破壊筒ヲ數
 線列ニ互リテ挿入シ一舉ニ之ヲ爆破セシムルヲ可トス
 第一百十九 數線列ノ障碍物ヲ爆破スルニ方リ半途ニ於テ作業不
 成功ニ終リタルトキハ爾後作業ノ復行ヲ容易ナラシムル爲既ニ
 開設セル突撃路ヲ確保シ置クコト必要ナリ
 第二百二十 器具ニ依ル突撃路ノ開設ハ時間ヲ要スルコト大ナリ
 ト雖其方法宜シキヲ得ルトキハ能ク全線列ニ互リ隱密ニ破壊ノ

目的ヲ達成シ得ルコトアリ
 器具ニ依リ障礙物ニ突撃路ヲ開設スルニハ第百十八ノ要領ニ依
 リ實施スルモノトス但區隊長ハ各班ニ破壞ノ場所及方法ヲ指示
 スルノ外其程度ヲモ示スコト必要ナリ
 第百二十一 掩覆材料ニ依ル突撃路ノ開設ハ通常突撃ト同時ニ
 之ヲ強行スルモノニシテ第百十八ノ要領ニ依リ第一線列ヨリ順
 次ニ且迅速ニ實施スルモノトス

第三章 外壕ニ於ケル突撃路ノ開

設

突撃路ノ開設 外壕ニ於ケル突撃路ノ開設

百十七

突撃路ノ開設 外壕ニ於ケル突撃路ノ開設

百十八

第二百二十二 外壕ハ敵ノ抵抗頑強ナラス且我火力ニ依リ敵ヲ制
壓シ得タルトキハ側防設備ノミヲ破壊シ或ハ煙藥筒ヲ用ヒテ其
效力ヲ失ハシメ此機ニ乘ジ突撃器材ヲ使用シテ之ニ突撃路ヲ開
設スルヲ得ヘシ

第二百二十三 外壕特ニ外岸頂附近ノ構造ハ突撃器材ヲ使用シ
大ノ影響ヲ及ホスモノトス故ニ特ニ之ヲ偵察スルヲ要シ且壕内
及外岸頂ニ在ル鐵柵等ハ要スレバ豫メ之ヲ破壊スルヲ可トス
第二百二十四 外壕ニ突撃路ヲ開設スルニハ通常滑棒、梯子及携
帶橋等ヲ用フルモノトス
第二百二十五 滑棒及梯子ニ依ル突撃路ノ開設ハ通常滑棒ヲ外岸

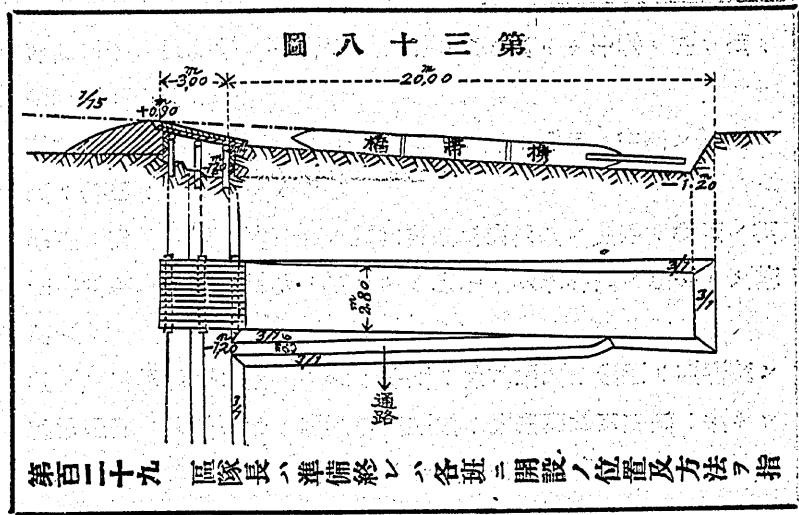
ニ梯子ヲ内岸ニ架シ之ヲ完成スルモノニシテ突撃部隊ヲシテ間
 断ナク壕ヲ通過シ得シムルカ爲ニハ通常一箇ノ滑棒ニ對シ二箇
 ノ梯子ヲ配當シ一突撃路ヲ開設スルニハ少クモ滑棒四、梯子八
 ヲ使用スルヲ可トス而シテ之ヲ配置スルニ方リテハ一箇ノ滑棒
 ニ對シ二箇ノ梯子ヲ夫々對向ノ位置ニ在ラシムヘシ各器材ニ間
 隔ハ少クモ其使用ニ妨ナキヲ限度トス

第二百二十六 携帶橋ニ依リ突撃路ヲ開設スルニハ一突撃路ニ對
 シ少クモ四箇ノ携帶橋ヲ用フルヲ可トス然レトモ所要ノ携帶橋
 ヲ得サルトキハ滑棒及梯子ヲ併用シテ之ヲ補足スルヲ可トス

携帶橋配置ノ間隔ハ滑棒及梯子ニ就テ規定シタルモノニ同シ

突撃路ノ開設 外壕ニ於ケル突撃路ノ開設

第二百二十七 外壕ニ突撃路ヲ開設スルニハ區隊長ハ外壕及側防
 設備ノ状態ヲ顧慮シ滑棒及梯子ヲ使用スル班及携帶橋ヲ使用ス
 ル班ヲ編成シ且必要ニ應シ側防設備ヲ破壊シ若ハ煙藥筒ヲ使用
 スル爲特別班ヲ編成シ之ニ突撃器材ヲ配當スルモノトス
第二百二十八 突撃器材ヲ搬出スル場所ハ突撃路開設ノ位置ニ正
 對シ又其置場ハ敵眼ニ遮蔽シ且器材ノ搬出ニ便ナラサルヘカラ
 ス第三十八圖ハ携帶橋置場ノ一例ニシテ滑棒及梯子モ亦同要領
 ニ依リ之ヲ整置スルヲ可トス



第二百二十九 區隊長ハ準備終レハ各班ニ開設ノ位置及方法ヲ指

突撃路ノ開設 外壕ニ於ケル突撃路ノ開設

示シ且作業後ノ處置ヲ示シタル後突撃路ヲ開設セシムルニ先テ側防設備ノ破壊班若ハ煙藥筒使用班ハ突撃器材使用班ニ先テテ前進シ側防設備ヲ破壊シ若ハ不意ニ其銃眼又ハ砲門ニ煙藥筒ヲ挿入ス

滑棒及梯子ニ依ル開設ニ在リテハ梯子班及滑棒班ノ順序ニ又携帶橋ニ依ル開設ニ在リテハ輓轉架班及架設班ノ順序ニ設置ノ位置ニ進出スルモノトス

班長ハ班ノ先頭ニ在リテ兵卒ヲ誘導シ速ニ所命ノ作業ヲ實施シ突撃路ヲ完成ス

第三百十 突撃路ノ開設終レハ區隊長ハ凡ユル手段ヲ用ヒ直ニ

之ヲ突撃縦隊ニ通報ス
 第三百三十一 凡テ突撃器材ニ依ル突撃路ノ開設ニ方リテハ如何ナル狀況ニ遭遇スルモ決シテ逡巡スルコトヲク緊密ナル協同ノ下ニ所定ノ作業ヲ敢行スヘシ中途ニ於テ開設ノ位置又ハ作業法ヲ變更スルカ如キハ氣勢ヲ減殺シ通常成功ヲ期シ難キモノトス

第二篇 手榴彈ノ用法

通則

第三百三十二 手榴彈ハ近接戦ニ於テ其爆發ニ依リ敵ヲ殺傷スル爲之ヲ使用スルモノニシテ我小銃火ノ威力ヲ發揚スルコト能ハ

手榴彈ノ用法 通則

1134-2

サル場合ニ於テ用フルトキハ特ニ有利ナリ
第百三十三 手榴彈ノ使用ハ通常投擲ニ依ルモノトス然レトモ
時トシテ障礙ニ利用スルコトアリ

第百三十四 手榴彈ハ其爆發ニ方リ多數ノ破片ヲ飛散スルヲ以
テ演習ノ爲實彈ヲ使用スル場合ニ在リテハ危害ヲ豫防スル爲特
ニ左ノ諸件ヲ遵守スヘシ

- 一 指揮官ハ爆發點要スレハ投擲手障礙設備ニ在リテハ之カ操
作ニ任スル者以下之ニ同シノ掩
- 壕ニ危険信號(晝間ハ赤色旗、夜間ハ赤色燈)ヲ掲ケ且之ヲ
- 中心トシ半径二五〇米〇〇ノ間ヲ警戒區域トシ哨兵ヲ配布
- シテ之ヲ限界シ尙部隊ノ退避スヘキ位置ヲ定メ安全信號

(晝間ハ綠色旗、夜間ハ綠色燈)ヲ掲ケテ之ヲ標示スルモノ
トス又投彈手ノ爲ニハ特別ノ掩壕ヲ設ケ投擲後直ニ之ニ掩
蔽セシムルヲ要ス

二 指揮官ノ命令ニハ通常左ノ號音ヲ用フ

「集レ」ノ號音ニテ投彈手ノ外總テ警戒區域外所定ノ位置ニ
集合シ人員其他ニ關シ異狀ノ有無ヲ指揮官ニ報告ス

「氣ヲ著ケ」ノ次ニ長音一聲ノ號音ニテ投擲操作ス

「前へ」ノ號音ニテ警戒ヲ撤去ス

三 不發彈ヲ生セシトキハ之ヲ他ニ移動スルコトナク其位置
ニ於テ靜ニ安全子ヲ結合スベシ若手榴彈地下ニ埋没シ之ヲ

掘り起セハ危険ヲ生スルノ虞アルトキ等ニハ別ニ其附近ニ
手榴彈ヲ投擲シ或ハ爆藥ヲ裝著シテ之ヲ誘發スルコトヲ勉
ムヘシ

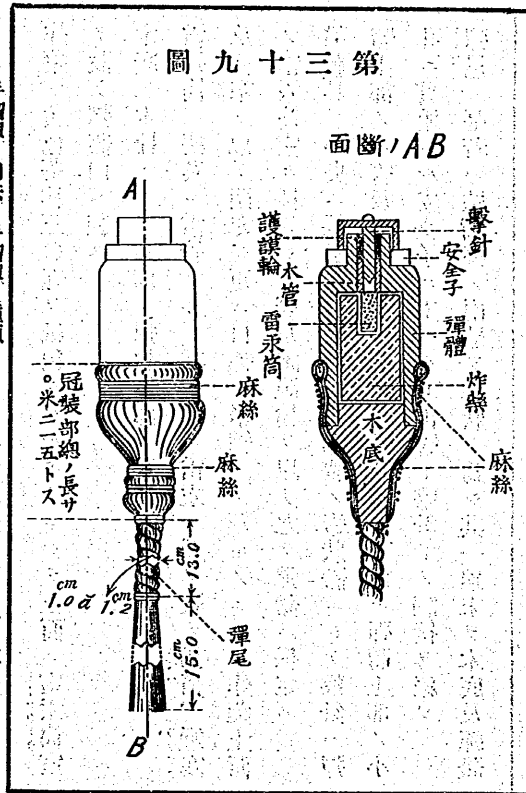
第一章 手榴彈ノ種類

制式手榴彈

第三百三十五 制式手榴彈ハ全備重量約五〇〇瓦ニシテ左ノ諸部
ヨリ成ル(第二十九圖)
彈體 銃製ノ圓筒體ニシテ頭部ニ木管室及護謨輪室ヲ中部ニ炸
藥室ヲ後部ニ木底室ヲ設ク

圖九十三第

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類



百二十七

炸藥 黄色藥約三〇瓦ヲ紙包シタルモノニシテ上面ニ雷汞筒室
 ヲ設ケ彈體内ニ裝ス
 木底 木栓ニシテ頭部ヲ彈體後部ニ嵌裝ス
 雷汞筒 藥莖ニ雷管ヲ裝シ其内部ニ雷汞一瓦ヲ收メ錫箔、蠟塞
 及紙塞ヲ以テ閉塞シ更ニ口部ヲ緊縮シタルモノニシテ炸藥上面
 ノ雷汞筒室ニ挿入シ木管及護謨輪ヲ以テ之ヲ彈體ニ保定ス
 擊發具 中央ニ擊針ヲ鋸著セル黃銅製ノ壺狀體ニシテ擊針ハ彈
 體上部ノ木管及護謨輪中ニ裝定シ壺狀體ノ下部ハ彈體上部ノ小
 孔ニ貫通スル安全子ニ支ヘラレ雷管ト擊針トノ觸接ヲ絶ツ
 彈尾 藥若ハ棕櫚繩ノ兩端ヲ總狀ト爲シ其一端末ヲ木底及彈體

ニ正シク冠裝シ木底ノ桿狀部ト彈體ノ環狀部トニ於テ麻絲ヲ以テ括リ其端ヲ反折シテ更ニ前ト同一ノ部分ニ於テ之ヲ緊束シ餘端ヲ剪除ス

第三百三十六 制式手榴彈垂直ニ落下スルトキハ彈著點ノ上方ニ於テ開角九十度ノ圓錐狀ヲ爲セル安全界ヲ生スルモ其他ノ部分ハ半徑二〇〇米〇〇ノ危險界ヲ生シ破片ハ全周ニ飛散スルモノトス

斜ニ落達スル手榴彈ハ其落角ノ大小ニ從ヒ安全界及危險界ノ位置ヲ變更ス而シテ其殺傷威力ハ落角四十五度乃至六十度ニ於テ彈著點ヲ中心トシテ半徑約五米〇〇ノ地域ニ及フモノトス但彈

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百二十九

著點ノ後方ニ及ホス威力ハ稍小ナリ
 第三百三十七 手榴彈ヲ保存スルニハ炸藥及雷汞筒ヲ各別ニシ其
 他ノ諸部ハ之ヲ結合(麻絲ハ假結束)シ置クモノトス又填藥セル
 手榴彈ヲ格納スル場合ニ於テモ雷汞筒ハ使用ノ期ニ至ルマテ必
 ス之ヲ分離シ置クヘシ
 炸藥及雷汞筒ハ罐又ハ箱内ニ收容シテ之ヲ密閉シ濕氣ノ侵入ヲ
 豫防スヘシ又同一ノ罐(箱)内ニ兩者ヲ收容スルヲ許サス
 第三百三十八 手榴彈ヲ遠距離ニ運搬スルニハ羅紗、布片等ニテ
 雷汞筒ヲ包ミ防濕ノ爲金屬製筒内ニ容レ其他ノ諸部ハ結合シタ
 ル儘彈尾ヲ彈體ニ纏絡シ適宜ノ容器ニ之ヲ收容スルモノトス

第三百二十九 手榴彈ヲ使用スルニ方リテハ先ツ雷汞筒ヲ全ク鉤止セラルルニ至ルマテ徐々ニ挿入シ次テ木管及護謨輪ヲ挿入シ且安全子ヲ裝シタル後擊針ヲ徐々ニ壓入シテ壺狀體ノ下縁ヲ安全子ニ接セシムヘシ但護謨輪ト擊針トノ緊密ノ度ハ護謨輪ニ依リ擊針ノ脱出ヲ支持シ得ルヲ以テ足レリトス而シテ擊針ヲ變位セシメサル如ク注意シ徐々ニ安全子ヲ側方ニ抽脱シタル後使用スルモノトス
 手榴彈ノ使用ヲ中止スルトキハ直ニ先ツ擊針ヲ脱シテ安全子ヲ舊位置ニ復シ結合スヘシ而シテ若干ノ安全子ハ豫備トシテ常ニ携帯スルヲ要ス

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百三十一

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百三十二

第四百十 手榴彈ハ通常彈體ニ近ク彈尾ヲ握リ左手(徒手ニ在リテハ右手)ニ之ヲ携ウ而シテ同時ニ數箇ノ手榴彈ヲ携ラルトキハ彈體ニ近ク彈尾ヲ緊束スル等ノ方法ニ依リ相互ノ觸撃ヲ防キ機能ヲ破損シ若ハ危險ヲ生セシメサルコトニ注意スヘシ

急造手榴彈

要旨

第四百十二 手榴彈ヲ急造スルニハ其全備重量ヲ通常五〇〇瓦内外トシ其形狀モ亦勉メテ投擲ニ便ナラシムルヲ要ス
第四百十三 急造手榴彈ハ其構造ニ依リ曳火及著發ノ二種ニ分

ツ而シテ甲ハ導火索ニ點火シタル後投擲シ乙ハ制式手榴彈ノ如ク著發セシムルモノトス

急造著發手榴彈ハ其製作複雑ナルノミナラズ取扱稍ハ危險ニシテ且地區地物ノ状態ニ依リ往々不發ヲ生ズルノ虞ナル者投擲前ニ點火ヲ行フノ煩ナク好機ニ乘シ直ニ使用シ得ルノ利ナリ急造曳火手榴彈ハ其利害概ネ之ニ反ス

第四百十三 急造手榴彈ニ用ラレ炸藥ハ取扱安全ニシテ且其爆發ニ際シテハ猛烈ナル爆發ヲ發シ且顯著ナル爆發力ヲ生起スルヲ必要トス故ニ通常爆藥特ニ黃色藥ヲ用テ
爆藥ヲ收容スヘキ彈體ハ通常鐵葉(罐詰)ノ空罐類ヲ應用スヲ用

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百三十三

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百三十四

ヒ内部ニ彈子(細斷シタル太キ鐵線層ヲ用フルコトヲ得)ヲ填實シ或ハ外部ニ破片ヲ増加スヘキ裝置ヲ爲ス

急造曳火手榴彈

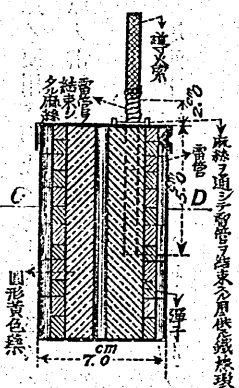
第四百十四 第四十圖ハ急造曳火手榴彈ノ一例ニシテ之ヲ製作スルニハ鐵葉罐内ニ圓形黃色藥三箇(一箇ノ黃色藥ハ其雷管室ヲ上ニス)及彈子トシテ若干ノ金屬ヲ填實シタル後蓋ヲ裝シ其側部ノ所々ニ窪ミヲ作り以テ其脱出ヲ防キ次テ緩燃導火索ヲ裝著セル雷管ヲ黃色藥ノ雷管室ニ挿入シ麻絲ヲ以テ之ヲ蓋ノ上面ニ鐸著シアル鐵線環ニ結著ス但雷管ヲ挿入セサル間ハ雷管室ニ對スル蓋ノ上面ニ鐵葉片ヲ鐸著シテ閉塞シ使用ニ方リ之ヲ刺キ

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百三十五

圖十四第

面斷' AB



面斷' CD



取ルモノトス
 導火索ノ長サハ彈著後敵ニ逃避ノ餘裕ヲ與ヘス且敵ヨリ投ケ返
 シヲ受ケサル爲過長ナラサルヲ要ス之ガ爲其長サ〇米三〇ヲ越

手榴彈ノ用途 手榴彈ノ種類

百五十二

エサルヲ可トス

装置後手榴彈ノ使用ヲ中止スルトキハ徐々ニ雷管ヲ除キ紙片又ハ木片等ヲ以テ雷管室ヲ閉塞スヘシ

急造著發手榴彈

第四百十五 第四十一圖ハ急造著發手榴彈ノ一例ニシテ左ノ諸部ヨリ成ル

彈體 鐵葉罐ヲ用ヒ且破片ヲ増加スル爲外部ニ鉛製ノ帶(適當ノ太サニ區畫ス)ヲ附シ罐ノ頭部ニ雷管ヲ結束スヘキ銅線ヲ纏著ス

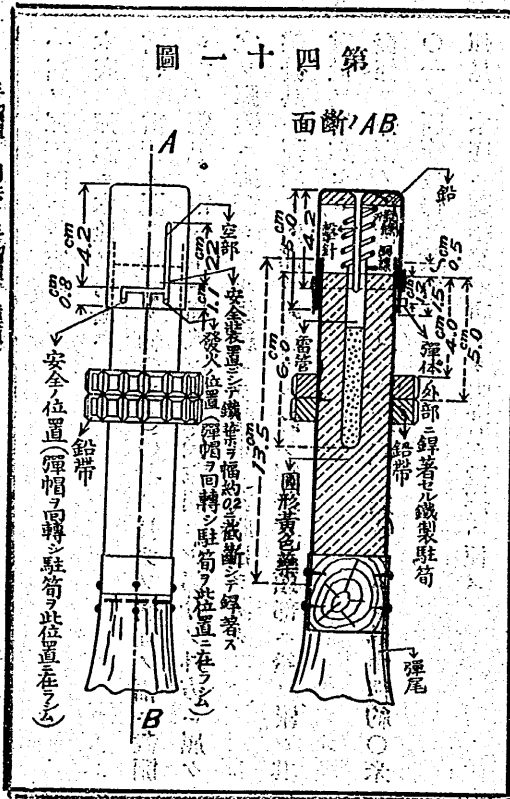
炸藥 雷管室ノ深サヲ正シク〇米〇六ニ増加シタル圓形黃色藥

圖一十四第

面斷 AB

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

頁三十七



一箇ヲ彈體內ニ收容ス

木底 彈體ニ木栓ヲ釘著ス

雷管 雷管ノ開口端ヨリ約〇米〇〇七ノ長サヲ適宜ノ幅ニ截開シ之ヲ藥包ノ雷管室ニ挿入シタル後截開セル部分ヲ外方ニ屈ケ之ヲ彈體ニ鐸著シアル銅線ニテ結束シ其脱出ヲ防ク

擊發具 彈帽ノ内部ニ銳利ナル釘ヲ鐸著シ且頭部ニ鉛ヲ附シ其重量ヲ増加セシム

發條 彈帽ノ變位ヲ防キ且安全裝置ヲ兼ネシムル爲中徑約〇米

〇一ノ圓筒發條ヲ收容ス

彈尾 木底ニ藁繩又ハ布片ヲ附著シ投擲ニ便ス

第四百四十六 急造著發手榴彈ヲ保存シ或ハ之ヲ運搬スルニハ雷管ヲ除去シタル後彈帽ヲ裝シ之ヲ安全ノ位置ニ回轉シ置クヘシ其他ノ注意ハ制式手榴彈ニ同シ

使用ニ方リテハ彈帽ヲ脱シ雷管室ニ雷管ヲ挿入シ銅線ニテ之ヲ結束シタル後再ヒ彈帽ヲ裝シ且之ヲ安全ノ位置ニ在ラシメ次テ彈帽ヲ回轉シテ發火ノ位置ヲ取ラシメ之ヲ投擲ス
發火裝置後使用ヲ中止スルトキノ處置ハ急造曳火手榴彈ニ同シ

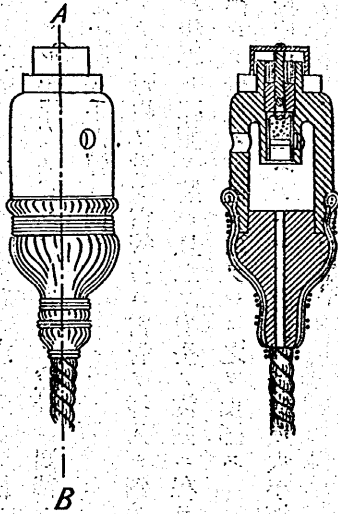
演習用手榴彈

第四百四十七 演習用手榴彈ハ全備重量約五〇〇瓦ニシテ其構造ハ爆藥ヲ有セサル外略、制式手榴彈ト同一ナリト雖彈體內雷永

1150

圖二十四第

面斷 AB



筒ノ周圍ニ制式手榴彈ノ如キ藥室狀ヲ與ヘ外壁ニ噴火孔ヲ穿未
且木底中心ニ毛圓孔ヲ貫通シ以テ藥莖ノ抽出ニ便カラシメテ

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ種類

百四十六

異ナリトス(第四十二圖)

藥筒ハ藥莢ニ雷管ヲ裝シ黑色小粒藥約〇瓦六ヲ填寫シテモイ
ニシテ演習用手榴彈内ニ裝置シ投擲ソ練習ニ方リ主トシテ命中
角度ノ正否ヲ檢スルノ用ニ供ス

第二章 手榴彈ノ投擲

要則

第四百十八 手榴彈ハ狀況特ニ目標ノ位置、地區地物ノ狀態及
投擲距離ノ大小等ニ應シ彈尾ヲ持テ或ハ彈體ヲ握リ立姿勢、膝姿
又ハ伏姿ニ在リテ之ヲ投擲スルモノトス然レトモ狀況之ヲ許ス

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百四十一

トキハ成ルヘク立姿ニ依ルヲ可トス
 第四百十九 手榴彈ハ目標近キトキハ彈體ヲ握リ又ハ彈尾ヲ短ク持テ遠キトキハ彈尾ヲ長ク持テ投擲スルヲ常トス
 第四百十 行進間ニ於テ手榴彈ヲ投擲スルニハ通常立姿ヲ用ヒ其瞬間停止スルモノトス但駈歩間ニ於テハ行進速度ヲ利用シテ投擲シ得ヘシ
 第四百十一 遮蔽物ノ背後ニ位置スル目標ニ對シテハ斜方向ヨリ投擲スルヲ可トス
 第四百十二 散兵壕内ヨリ胸牆ニ直交シテ投擲スル場合ニ於テ壕幅狭キトキハ後崖ノ一部ヲ掘擴シ又ハ斜削シテ投擲ニ便ナラ

シムルコトアリ又踏槩ノ幅狭キトキハ適宜之ヲ増大シ或ハ内斜
面脚ニ左足ヲ置クヘキ孔ヲ穿開スルヲ可トス

第五百十三 手榴彈ノ最大投擲距離ハ立姿ニ於テ彈尾ヲ持テ投
擲スル場合中等ノ投擲手ニ在リテハ約四〇米〇〇ヲ標準トシ其
他ノ場合ニ在リテハ投擲ノ方法ニ依リ差異アリト雖前者ニ比シ
著シク其距離ヲ減スルモノトス而シテ落角ハ約五十度内外ヲ適
當トス

第五百十四 手榴彈ノ投擲ハ指揮官ノ號令、命令又ハ記號ニ依
リ行フモノトス然レトモ投擲姿勢ハ目標ノ状態ト距離トニ應シ
適宜投擲手ノ選擇ニ委スルコト多シ

第百五十五 部隊ヲ以テ手榴彈ヲ投擲スルニハ定規ノ散開隊形ヲ以テスルヲ通常トス時トシテハ一層廣キ間隔ヲ取ルコトアリ又如何ナル場合ニ於テモ一步以下ニ其間隔ヲ縮小スルヲ許サズ是投擲操作ヲ不便ナラシメ且隣兵ニ危害ヲ及ホスノ虞アレハナリ

第百五十六 手榴彈ハ通常敵ニ四尺シテ急遽ニ之ヲ投擲スルヲ以テ特ニ自若トシテ其靚ヲ定メ必中ヲ期セザルヘカラス其携行彈數ハ通常多クザルヲ以テ特ニ然リトス
手榴彈ノ投擲ハ必ス十分ナル效果ヲ豫期スルトキニ於テ行ヒ勉メテ其節用ヲ圖ルヘシ之カ爲指揮官ハ要スレハ投擲ニ方リ其投

彈手ヲ指定シ或ハ連續投擲スヘキ彈數ヲ示スコトアリ

第五百十七 手榴彈ハ各種ノ方向及距離ニ在ル目標ニ對シ力及操作ノ加減ニ依リ少クモ目標ヲ中心トスル半徑五米〇〇ノ圈内ニ到達シ得ル如ク其投擲法ヲ練習セシムヘシ特ニ目視シ得サル目標ニ對シ練習スル場合ニ在リテハ教官ハ彈著ヲ觀測シテ其躲避ヲ指示シ之ヲ修正セシムルコトニ注意スルヲ要ス

第五百十八 手榴彈投擲ノ練習ハ先ツ徒手立姿ニ於テ彈尾ヲ持テ投擲スル要領ヲ十分會得セシメ次テ其他ノ場合ニ及ホシ又部隊ヲ以テスル練習ハ兵卒略々各個ノ投擲法ニ熟シタル後之ヲ行フモノトス

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百四十六

彈尾ヲ持チ投擲スル方法

第五十九 彈尾ヲ持チ手榴彈ヲ投擲セシムルニハ豫メ左ノ號
令ヲ下シテ投擲ノ準備ヲ爲サシム

投ケ方用意

兵卒ハ銃ヲ左手ニ移スト共ニ手榴彈一箇ヲ右手ニ持ツ

第六十 立姿ニテ投擲ノ姿勢ヲ取ラシムルニハ兵卒ニ目標ヲ
指示シ左ノ號令ヲ下ス

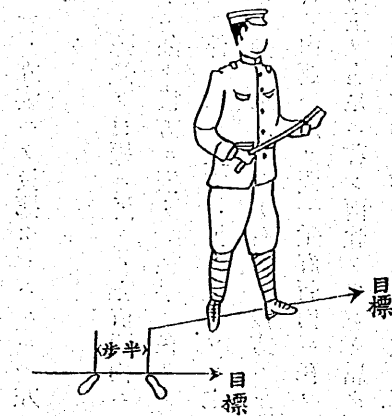
立姿投

兵卒ハ先ツ目標ニ面シ次テ頭ヲ其方向ニ保チタル儘右向ヲ爲シ
ツツ右足ヲ新線上右方半歩ノ所ニ踏開キ銃ヲ左臂ニ托シ左手ヲ

圖三十四第

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

スルコトナク左肘ヲ輕ク體ニ接シタル儘彈體ヲ左手ノ掌上ニ載



以テ彈體ヲ握リ右
手ヲ以テ安全子ヲ
抽キタル後投擲距
離ニ應シ更ニ右手
ヲ以テ適度ノ長サ
ニ彈尾ヲ握リ靜ニ
彈ヲ垂下シ銃ヲ左
手ニ復ス(徒手ニ
在リテ小彈ヲ垂下

百四十七

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百四十八

ス(第四十三圖)

第百六十一 立姿ニテ投擲セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

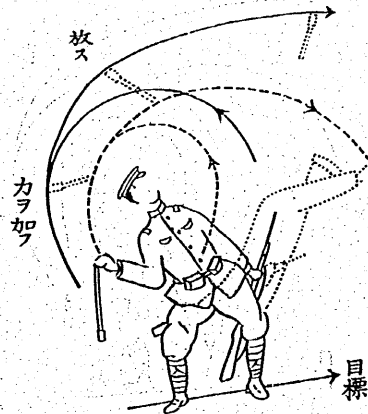
投ケ

垂下シアル彈體ヲ目標ニ通スル垂直面内ニ於テ第四十四圖其一
 其二ニ示ス如ク後方ニ振り(徒手ニ在リテハ左手ニテ彈體ヲ右
 臂ノ旋回ニ伴フ如ク上方ニ押シ上ケツツ之ヲ放ツ)右拳ヲ肩ノ
 稍後方ニ持チ來タシ之ヲ右臂ノ後方ニ垂下ス此際彈體及彈尾
 竝右前臂ノ内側ハ之ヲ同一垂直面内ニ在ラシメ又上體ヲ右側面
 ニ屈シ體重ヲ右足ニ移シ兩膝ヲ少シク屈ク而シテ左臂ハ銃ヲ持
 テタル儘目標ノ方向ニ伸ハシ自然ニ之ヲ舉ク是ニ於テ兩臂及體

第十四圖 其一

如ク連續投擲ス但第二彈以後ノ安全子ノ抽出ハ第六十ノ要領

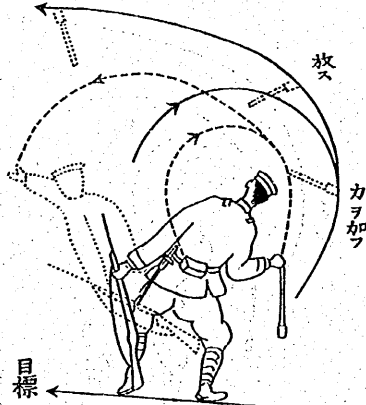
手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲



ノ再ヒ舊位ニ復セ
 シトスルカラ彈體
 ニ作用セシメ彈尾
 ラ緊張シタル儘高
 ク振り出シ彈尾ノ
 略、水平トナリタ
 ルトキ強クカラ加
 ヘテ投擲ス
 次テ兵卒ハ前項ノ

百四十九

第十四圖
其二



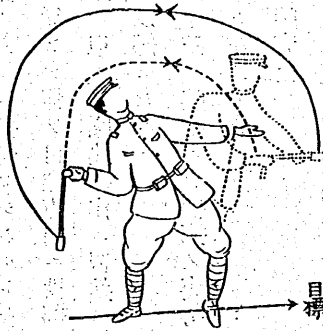
十一第一項ノ操作ハ手榴彈投擲法ノ基礎ナルヲ以テ特ニ注意シ

ニ依ル若彈數ノ制限
ヲ要スル場合ニ在リ
テハ「投ケ」ノ次ニ「何
發」ノ號令ヲ加フ然
ルトキハ兵卒ハ所命
ノ彈數ヲ投擲シタル
後次發ノ準備ヲ爲ス
コトナク後命ヲ待ツ
第百六十二 第百六

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百五十

第四十五圖



テ十分ニ其要領ヲ會得セシムルヲ要ス之カ爲最初ハ徒手ニ依リ
 彈ヲ投擲スルコトナク左手ニ持チタル彈體ヲ押し放チ右前臂ノ

後方ニ垂下シテ停止スルヤ
 直ニ之ヲ反撥シテ左手ニ復
 セシメ反覆施行シテ圓運動
 ニ於ケル彈、臂、體ノ關連
 操作ニ慣熟セシメ次テ彈尾
 ヲ手ヨリ放ツ時機ヲ會得セ
 シムヘシ(第四十五圖)而シ
 テ此操作ニ於テ左手ヲ正シ

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

ク目標ノ方向ニ指向セシムルトキハ右手ハ自然ニ左手ノ方向ニ作用シ從ヒテ彈ヲ目標方向ニ投擲シ得シムルモノトス
 兵卒略、以上ノ關連操作ニ習熟スルトキハ左手ヲ用フルコトナク彈ヲ投擲セシムヘシ

第六十三 膝姿ニテ投擲ノ姿勢ヲ取ラシムルニハ兵卒ニ目標ヲ指示シ左ノ號令ヲ下ス

膝姿投

兵卒ハ先ツ銃ヲ體ノ左側ニ於テ地上ニ置キタル後目標ニ面シ次テ頭ヲ其方向ニ保チタル儘右向ヲ爲シ兩膝ヲ少シク開キテ腕キ兩足尖ヲ立テ臀部ヲ踵ヨリ離ス次テ第六十ト同一ノ方法ニ依

圖六十四第



目標

第百六十一ト同一ノ方法ニ依リ投擲ス(第四十七圖其一其二)
 第百六十五 伏姿ニテ投擲ノ姿勢ヲ取ラシムルニハ兵卒ニ目標
 ヲ指示シ左ノ號令ヲ下ス

伏姿投

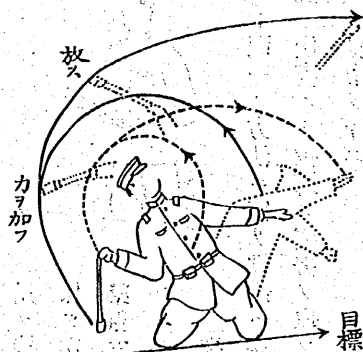
投ケ

リ安全子ヲ抽キ右手ヲ以テ彈
 尾ヲ持テ左手ノ掌上ニ彈體ヲ
 保ツ(第四十六圖)
 第百六十四 膝姿ニテ投擲セ
 シムルニハ左ノ號令ヲ下ス

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百五十三

第四十七圖
其一



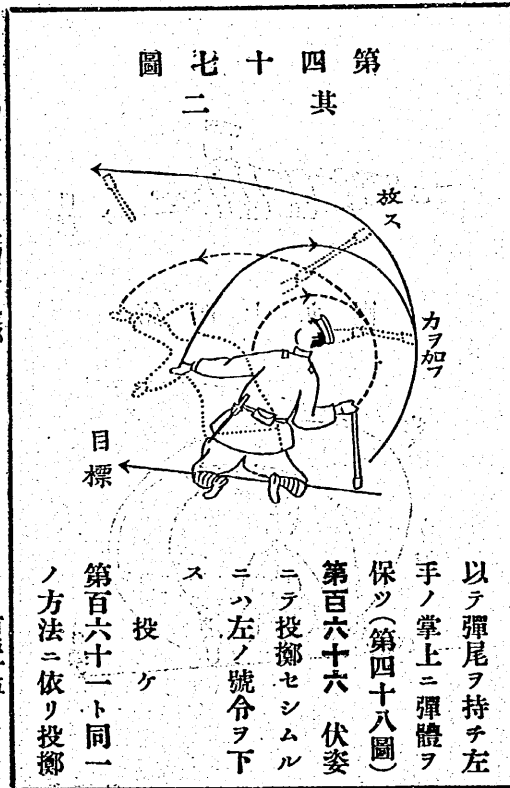
手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百五十四

兵卒ハ先ツ銃ヲ體ノ
 左側ニ於テ地上ニ置
 キタル後目標ニ面シ
 兩膝ヲ地ニ著ケ直ニ
 左手ヲ概ネ右膝ノ前
 ニ出シ地ニ著ケ目標
 ノ方向ニ伏臥シ兩肘
 ヲ地ニ支ヘ第百六十
 下同一ノ方法ニ依リ
 安全子ヲ抽キ右手ヲ

圖七十四第
二 其

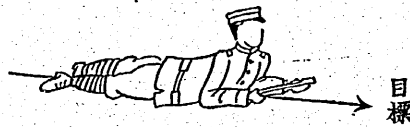
手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲



百五十五

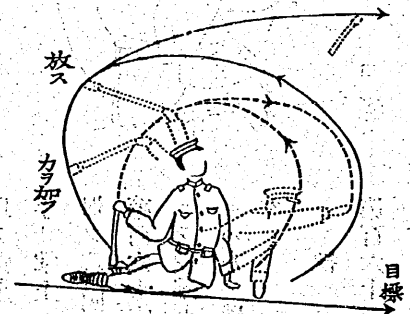
1166

圖八十四第



手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

圖九十四第



百五十六

ス但右脚ヲ左脚ノ後方ニ移スト同時ニ上體ヲ右側面向ニ起シ且
左手ヲ以テ彈體ヲ上方ニ押シ上クルト共ニ上體ヲ起シテ投擲ス
〔第四十九圖〕

第百六十七 投擲ヲ中止セシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

投ケ方待テ

兵卒ハ投擲姿勢ノ儘次發ノ準備ヲ爲ス

第百六十八 投擲ヲ止メシムルニハ左ノ號令ヲ下ス

投ケ方止メ

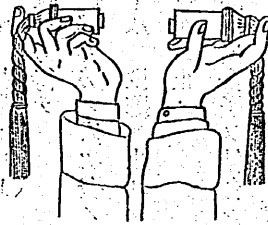
兵卒ハ靜ニ安全子ヲ結合シタル後舊姿勢ニ復ス

彈體ヲ持チ投擲スル方法

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ投擲

百五十七

第五十圖



間ニ垂ルモノトス(第五十圖)

第二章 手榴彈ノ利用

第六十九、彈體ヲ持チ投擲スル方法ハ彈尾ヲ持チ投擲スル要領ト同一ナリ

彈體ヲ握ルニハ食指ノ第一節ヲ彈ノ後部ニ當テ拇指ト中指トヲ以テ彈體ヲ挾ミ其他ノ指ハ輕ク之ニ添ヘ彈尾ヲ食指ト中指トノ

攻撃ノ場合

第七十 手榴彈ハ通常突撃ノ際之ヲ使用スルモノトス故ニ突撃部隊ニハ必要ニ應ジ手榴彈ヲ携帯セシメ又特ニ編成セル手榴彈投擲部隊ヲモ配屬スルコトアリ

第七十一 突撃ニ方リ手榴彈ヲ使用スルニハ突撃部隊ハ敵ノ不意ニ出テ成ルヘク一齊ニ之ヲ投擲シテ敵ヲ震駭シ其動搖ニ乘ジ機ヲ逸セス直ニ突入スヘシ徒ニ敵ト手榴彈ノ戦闘ヲ交ヘ進襲ノ氣勢ヲ挫折スルコトアルヘカラス

手榴彈投擲部隊ヲ配屬セラレアル場合ニ於テハ該隊ハ突撃部隊ノ直前ニ前進シ手榴彈ヲ投擲シテ我突入ヲ準備シ突撃部隊格闘

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ利用

百五十九

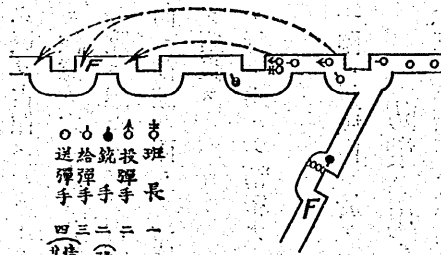
ヲ始ムルノ時機ニ到レハ適時其側方若ハ後方ヨリ手榴彈ヲ投擲シ敵ノ後方部隊ノ來援ヲ妨害シ或ハ陣地内ノ掩蔽部等ニ殘留スル敵兵ヲ掃蕩スヘシ

第七十二 突撃部隊ハ敵陣地ノ占領後敵ノ逆襲ニ備スル爲迅速ニ所要ノ手榴彈ヲ補給スルコトニ注意スルヲ要ス

塹壕内戦闘ノ場合

第七十三 散兵壕又ハ交通壕内ヲ前進シツツ逐次之ヲ占領スルニハ手榴彈ヲ使用スルコト多シ之ヲ爲通常投擲手、銃手、給彈手及送彈手ヨリ成ル一班ヲ編成ス其人員ハ壕内ニ於ケル之カ行動ノ自由ヲ得シムル爲必要ノ最少限ニ止ムルモノトス

圖 一 十 五 第



手榴彈ノ用法 手榴彈ノ利用

- 送彈手
- 拾彈手
- 銃手
- 班長

第七十四 投彈手ハ銃手ノ掩護ノ下ニ横牆ノ後側ニ位置シ給彈手ハ之ニ跟隨シ送彈手ハ其後方ニ位置スルモノニシテ投彈手ハ最近ノ壕内ニ在ル敵ニ對シ手榴彈ヲ投擲シ銃手ハ爆發ノ瞬間ヲ利用シ班長ノ命ニ依リ白兵ヲ揮ヒテ突進ス而シテ此際成ルベク退却スル敵ヲ追

尾シ廣ク壕ヲ占領スルコトヲ勉ムヘシ又班長ハ敵ノ位置ト彈ヲ
 效果トニ注意シ之ニ基キ投擲及前進ヲ指揮スルモノトス
 壕ノ支分點ニ達セバ之ヲ占領シ一ノ入口ヲ他班ニ譲リタル後所
 望ノ方向ニ前進ス而シテ新壕ニ向フ班ハ前項ト同法ニ依リ逐次
 其領域ヲ擴張ス

此戦闘ヲ行フ爲ニハ精密ナル塹壕圖ヲ有スルトキハ極メ尙便ナ
 リ

第五十一圖ハ塹壕内ニ於ケル手榴彈戰鬥ノ一例トス

防禦ノ場合

第七十五 手榴彈ハ逆襲ノ際又ハ敵兵我火線直前ニ在ル小銃

ノ死角内ニ進入シ來リタルトキ之ヲ使用スルヲ通常トス

第一百七十六 戦闘ノ經過中適時ニ攻勢移轉ヲ爲シタル場合ニ於ケル手榴彈ノ使用法ハ攻撃ノ場合ト異ナル所ナシ然レトモ乘スヘキ機會ナク敵兵遂ニ突撃シ來リタルトキハ猛烈ニ手榴彈ヲ投擲シ其突撃ヲ頓挫セシメ此瞬間ニ於テ白兵ヲ揮ビ決然逆襲ヲ轉スベシ

第一百七十七 手榴彈ヲ以テ敵ノ突撃ヲ防止スル爲ニハ主トシテ其先頭ニ集中スル如ク投擲スルモズトス

第一百七十八 防禦線上ニ於テ手榴彈ヲ使用スル場合ニ於テハ敵ノ投擲距離ニ達セントスル以前ニ於テ準備ヲ整ヘ投擲時機ヲ失

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ利用

百六十三

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ利用

百六十四

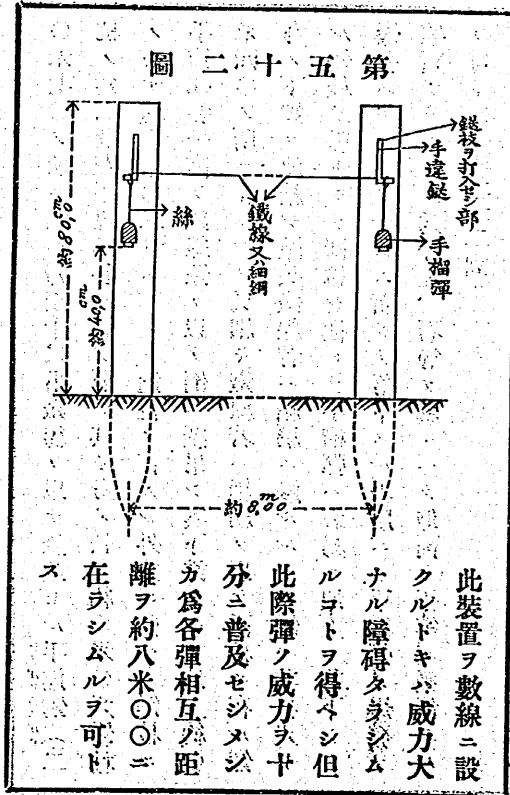
セツルコト緊要ナリ
 第百七十九 對壕ニ依リ前進スル敵ニ對シテハ勉メテ攻路ノ方
 向ヲ偵知シ其攻路頭ニ投擲スルヲ要ス又噴火孔ヲ占領セル敵ニ
 對シテハ其孔唇ニ近ク孔内ニ投擲スルヲ可トス
 第百八十 手榴彈ヲ障礙ニ利用スル場合ニ在リテハ通常障地前
 手榴彈ノ投擲距離以外ニシテ敵ノ通過ヲ豫期スル地點等ニ於テ
 手榴彈ヲ杭ニ懸吊シ或ハ之ヲ地中ニ植立シ敵兵之ニ觸レ若ハ之
 ヲ踏ミタルトキ爆發スル如ク設備スルモノトス
 手榴彈ヲ杭ニ懸吊シテ障礙ト爲スニハ適宜ノ杭ヲ約八米〇〇宛
 隔テテ高サ約〇米八〇トナル如ク植立シ杭ノ内側ニ於テ地上約

○米七〇ノ所ニ六番乃至十二番鐵線ヲ以テ急造セル手遠鏡ラチガヒカスガヒ(十二
 杭ノ爲右及左手遠鏡各一箇ヲ要シ其鏡身ノ長サ約〇米〇六鐵枝
 ノ長サ約〇米〇二トス)ノ十鐵枝ヲ打入シ外方ニ向ヘル鐵枝ニ
 手榴彈各一箇ヲ鐵線環ヲ以テ倒ニ懸吊シ其下端ヲシテ地上約〇
 米四〇ノ所ニ在ラシメ又細キ鐵線若ハ細網ヲ以テ兩杭ニ在ル鏡
 身ノ下端ヲ連結シ敵兵鐵線若ハ細網ニ觸ルルトキ鏡ハ其打入キ
 ル鐵枝ヲ軸トシテ回轉シ從ヒテ手榴彈ハ容易ニ地上ニ落下シテ
 爆發スルコトヲ得シム而シテ落下スル場所ニハ手榴彈ハ爆發ス
 確實ナラシムル爲煉瓦、石等ヲ成ルヘク地面ト平等ニ敷置スル
 ラ可トス(第五十二圖)

手榴彈ノ用法 手榴彈ノ利用

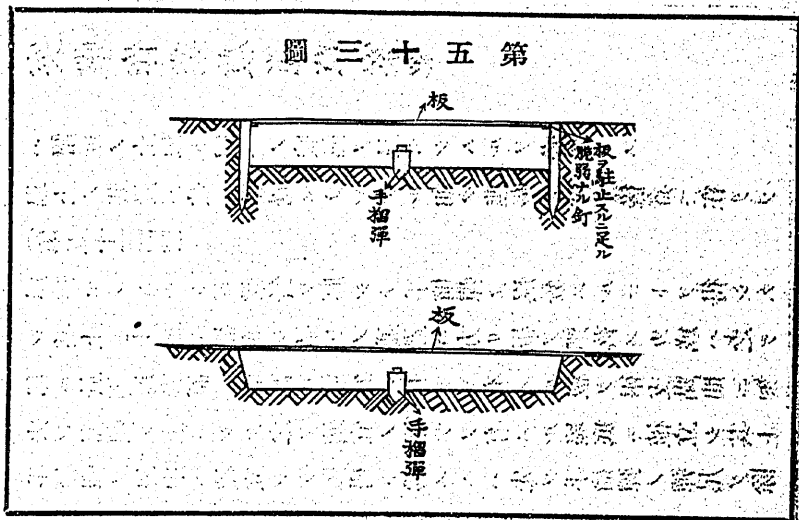
百六十五

圖二十五第



手榴彈ノ用法 手榴彈ノ利用

百六十六



手廻りノ用法 手廻りノ利用

厚六寸半

1177

手榴彈ヲ地中ニ植立シテ障碍ト爲スニハ先ツ手榴彈ノ彈尾ヲ除去シ彈頭ヲ上ニシテ之ヲ適宜ノ深サヲ有スル壕底ニ植立シ其上部ニ於テ地表面ト同高ニ適宜ノ長サヲ有スル板ヲ兩支點間ニ架シ其上ニ土砂ヲ撒布シ敵兵ノ通過ニ方リ板ヲ踏落スカ或ハ之ヲ屈撓セシムルトキ擊針ヲ壓シテ手榴彈ヲ爆發スルコトヲ得シム

(第五十三圖)

以上ノ裝置ハ敵ニ發覺セラレサル如ク遮蔽シ特ニ後者ニ在リテハ附近ノ土地ト同一ノ状態ヲ呈セシムルヲ必要トス

突擊作業教範草案終